

328-83



柴田環著
世界のオペラ

合資
會社 共益商社書店發行

45. 5. 16

問淵為語
花底滑

壬子三月為吳田曼唱錄白居易句

青淵老生



伊太利大使閣下寄語

甚だ尊敬せる柴田環女史に寄語す。

貴邦と我が伊太利とを比較するは余に取りて難事なり。そは此の比較を試みんとせば、余は貴邦を知る事、我伊太利を知る如くなるか、若しくは、少なくとも數ヶ年貴邦に駐まりて、貴國語を充分に理解せざれば不可能なればなり。而して余は此の不可能者の一に屬するを遺憾とす。若し夫れ音樂が一國民の文化に如何の影響を及ぼすべきやに就き、判断を下さんとせば、之れを論議すべく、數冊の書を著作するも、思ふに結局的斷案を下す能はざるものあらん。然れども音樂が超世界的想念を吾人に喚起せしめ、

(1)

之れを深甚に感ずれば、人類と、人類の多くが知るを願ふの神秘界とを接合せしむべき結帯なるは疑を容るゝ餘地なし。そは音楽は人語の語り難きを語り得るの語を有すれば也。然り音楽は人事と神事、實在と非實在との橋梁に外ならざる也。

伊太利全權大使

千九百十二年三月東京にて

侯爵 グイチヨリー

(2)

男爵後藤新平閣下寄語

(上巻)抑々オペラは世界文華の粹とも謂ふべく世の風教に影響するところ至大にして經世家の忽諸に附すべからざる事なるは申すまでも無之候我國にも散東の流より出たる能ありて今なほ盛に行はるるなれば材を此に取りて善く調和するを得ば頓がて世界的オペラの間に一異彩を放つの望み必ずしもなきに非ずと存られ候柴田女史前きに試演せられたる日本の歌劇と云い此たびの著といひ或は此邊の用意に本き候はんと察せられ小生は本書の刊行もて斯界の燈屋として相喜び候一人に御座候(下巻)

明治四十五年四月

後藤 新平

(4)

普魯西樂長ユンケル教授序文

余は柴田女史の「世界のオペラ」に一序文を記するを光榮とす。日本に於ける最良の聲樂家は何人なりやと問ふ者あらば、余は第一に指を柴田女史に屈し、次いで太田恒子夫人（舊性安東氏）を挙げざるを得ず。柴田女史の聲樂家としての價値は定評あるが故に、余の附言を要せず。然れども女史に對して教鞭を取りたるの光榮を有する余をして、事實を語らしめば、女史は獨り卓越なる聲樂家たるに止まらず、優秀なる音樂者なりと斷言するに躊躇せず。而して女史の師たりしを故を以て、余にして誇り得るものありとせば、女史が有する寶玉的音聲を、日本に發見し得たるに在るの

(5)

み。

烏兔匆々十有二年、曾て女史がシエーネ、エルレンを唱ひたるの時代を追懐し、更らに安東嬢がローレライを歌ひたるの時代を回顧すれば、當時日本に於ける泰西音樂の前途や、洋々春の海の如く、希望の光輝に満てるの感ありき。然るに今日日本に於ける泰西音樂の未來は必ずしも樂觀し難きの故なしとせず。更らに一步を進めてオペラに就て語らんか、帝國劇場がオペラ部を起し、柴田女史をして、これが首脳たらしめてより、余と余の同僚とは各微力を致しつゝある事なるが、現下のオペラは未だ以て成功の域に達せず。女史が之が爲めに拂ふの多大なる犠牲は、オペラの現

(6)

狀と對比する能はざる也。此處に於て前者に顧み後者を思へば、日本樂界が急速に、而かも油斷なきの進歩を計り、以て柴田女史が拂へる犠牲が、陪加又陪加せるの成功収獲に依りて報ぜらるゝの時代到來を余は希ひて已まず。此希望の實現に接近せしめ得べき手段の一として、女史の此書の如き、蓋し甚だ有効なるは、余の確信する處なるを以て、余は女史の勞を多とし。爰に女史の勝利多き前進を祈願す。

(7)

アウグスト、エンケル

世界の

オペラ

世界のオペラ 目次

著者の告白..... 一

注 意..... 一一

○第一、フヒガロの婚禮.....モツアト..... 一三

第二、女は皆んをかうしたもの..... 全..... 二六

第三、ドシ、チユアン..... 全..... 三三

第四、王宮よりの救助..... 全..... 四六

○第五、魔法の笛..... 全..... 五一

世界のオペラ 目次

第十六、ファイテリオ	ベートホーヴェン	六三
第十七、オルフォイス	グルック	七〇
第十八、アウリスのイフィゲニー	全	七六
第十九、擔水夫	ケルビニイ	八八
第二十、シピラの理髮師	ロシニイ	八九
第二十一、白衣の婦人	ボアルデュー	九一
第二十二、巴里のヨハン	全	一〇二
第二十三、イエソルダ	スポール	一〇六
第二十四、壁工と錠前屋	オワベル	一〇九
第二十五、ポルティツイの女陸	全	一一七
第二十六、黒装束	全	一二七

第十七、フラ、ディアボロ	全	一三四
第十八、猶太の女	ハレビー	一四四
第十九、ノルマー	ペリニー	一五六
第二十、ロンジュモ一の飛脚	アドルフ、アダム	一六五
第二十一、グラナダの夜營	クロイツェル	一七四
第二十二、ラムメルモールのルシヤ	ドニチエツェイ	一八〇
第二十三、聯隊の娘マリヤ	全	一八七
第二十四、ツァムバ	ヘロルド	一九五
第二十五、オベロシ	ウエベル	一九九
第二十六、フライシュッツ	全	二一一
第二十七、オイリアンテ	全	二二二

第二十八、ハンス、ハイリング マルシネル 二三三

第二十九、ワムビル 全 二四四

第三十、騎士團員と猶太の女 全 二五四

第三十一、鬼のロヘルト マイヤーヘル 二六七

第三十三、亞弗利加の女 全 二七九

第三十三、豫言者 全 二九〇

第三十四、フゲノット教徒 全 三〇二

第三十五、兩人の狙撃兵 ロルチング 三二四

第三十六、露帝と大工 全 三三四

第三十七、ウンディーネ 全 三三一

第三十八、野獣の射手 全 三四〇

第三十九、刀鍛治 全 三五〇

第四十、ゲノベバ シューマン 三六〇

第四十一、アレサンドロ、ストラテラ フロトー男爵 三六五

第四十二、マルタ(リッチモンドの市場) 全 三六九

第四十三、仙人の小鐘 エーメ、メラール 三七九

第四十四、リゴレット ヴェルディ 三八六

第四十五、アイダ 全 三九七

第四十六、ラ、トラビアタ 全 四〇二

第四十七、トルバドウル 全 四〇八

第四十八、カルメン ビゼー 四一八

第四十九、マルガレーテ(ファウスト) グノウ 四二六

第五十、ミニオン トマス 四三二

第五十一、處女屠 ホルスタイン 四三八

第五十二、フォルクンダ クレッチメル 四四三

第五十三、強情女の馴致 キョッツ 四四七

第五十四、ウヰンソールの陽氣な女房 ニコライ 四五五

第五十五、トスカ フシニイ 四六二

第五十六、マダム、バターフライ 全 四六七

第五十七、タンホイゼルとワルトブルグの歌人戦 ワグネル 四七六

第五十八、ローエングリン 全 四八三

第五十九、トリスタンとイゾルデ 全 四八八

第六十、飛行する和蘭人 全 四九三

第六十一、リエンチ 全 四九八

第六十二、爐邊のハイムヒェン ゴルトマルク 五〇三

第六十三、サバの女王 全 五一二

第六十四、バグダットの理髪師 コルネリウス 五二〇

第六十五、カワレリア、ルスチイカナ ビエトロ、マスカニー 五二六

第六十六、セッキンゲンの喇叭手 ネスレル 五三一

第六十七、ハメルンの鼠取 全 五三九

第六十八、福音の人 ウヰルヘルムキエンツル 五四九

第六十九、金の十字架 フリュル 五五四

第七十、道化師(ハリヤッチ) レオンカワロ 五六〇

世界のオペラ 目次
歌劇沿革小話.....

五六七

世界のオペラ 目次終

著者 柴田 環



著者の告白

發刊の目的——音樂に國境なし——音樂の感受と其國——歌劇「熊野」——日本人の音樂能——日本と伊太利——聲樂——日本音樂の特長及短所——世界的音樂——音樂上の鎖國念——帝劇の舞臺に著者が立つの理由——歌劇の將來——成功は請合也

段々と我が邦にも歌劇が流行し來るものと信じて、世界で有名な歌劇七十曲程の畧筋を江湖にお知らせ申したら、御參考として御便利であるまいかとの考へから、「世界のオペラ」ある名の下に、此書を公に致しました次第で御座います。元來芝居の筋書と申すものは、其芝居を見物致しませんでは、十分に合点せられ難いもの様に存じて居ります。

従つて満足に理解せらるゝ様に歌劇の筋をば記しますれば此位の大きさの本では足りません譯で、實は此の点に就て、大に苦勞致しましたが、ごうも思ふ様には參らず、仕方おしに各歌劇の畧筋をざつと記した丈に止めました。日本人の出る日本の芝居筋書ですら、一寸讀んでは、興味も乏しく、合点の行かぬ節多きに、況して外國物で、片假名澤山で、外國人名のみ入つて居りますのみならず、集めて記しました私自身が、本文にある實物歌劇を見物も致さず、只單に此のオペラや、彼の歌劇中の歌詞を歌ふた事がある位に過ぎません次第で、益々以て江湖に公にするに就きましては、幾度か遠慮し度いと存じましたが、折角處々より集め、亦伺ひました各種歌劇の筋を、其儘に私の頭にお預りして置くも、如何と存じまして、思ひ切つて印刷に附せしめたのですから、誤てる事や、不明白な個所もございませうが、他日歌劇に關する立派な著書が現はるべきことを御期待あつて、その露拂ひと御恩召し御寛大に御愛讀を乞ひ奉

ります。たゞく此書に由り世界著名のオペラには、あゝ云ふ筋のもあり、こんな狂言もあると云ふ事丈けが、身を音楽に委ねて居らると否とを問はず、一般の御方に知られ、これが何かの御役に立てば、私の身に取り非常な幸福と存じます。

以上は此書を公に致しました私の心持ちでございまして、此機會に一つ申述べ度い事と、申し述べねばならぬ事を、申述べさして頂きます。

申述べ度い事は、一言で申しますると、學術も藝術も共に世界的のものある事でございます。

無論、この國にも各其國風國粹はありまして、自づから特長も其中に存じては居りますが、高地から見下ろしますれば、學術にも藝術にも國境は無いと存じます。

假令へばマルセイエイユの歌を聽けば、佛國人の血は湧が如くに感ずる丈け他國民も動くかと云へば、否と應へねばならず。獨乙のワツハト、アム、ラインの歌も、獨乙人

がそれを耳にして感ずる丈けに、他國人には響かないのです。ですが、マルセイエイユの歌、獨乙國防の歌、または我が國の何かの歌、この歌をこの國民が聞いても、音樂としての感受が快感を喚起すると云ふ點に至つては、地圖上の國別色と没交渉であると存じます。

此頃日本語で記せられ、日本人が上場せられた歌劇熊野を私共が演じました際歌劇亡國論すら御唱道にあつた方も御座いました様に記憶致して居りますが、一切の創めは難ありと申す諺通り、上手、下手は別問題で、非難も御尤とは認めつつ、一面「藝術は世界的」と云ふ原則の永世不滅あるを思ひ、私かに私を慰めぬでもありませんでした。兎に角、かゝる音樂が如何にして、日本の國風と漸次一致し來るか云ふ事は最も興味多き問題で、此問題の解決は恐らく時を要するでありませう、ですが、時の問題で、可能不能の問題では無いと確信して居ります。

特に同化力に富める点に於ては、恐らく我國は、世界の第一位に立つもの。泰西文物輸入后、半世紀も経過せぬ今日、已でに可あり西半球の文物を消化したるを見ても、歐洲音樂が本邦人の同化を受ける事も、決して餘りに遠くもあるまいと考へます。現に來遊外人が日本人の泰西音樂演奏を聴いて、如何に日本人が急速に音樂上に進歩したかを驚嘆して居るとの事です、(これは私共に對しての御世辭を輕信してではありません)この点に於ては私の母校たる東京音樂學校の大功勞は看過すべからざる事實です。特に聲樂の上に於ては伊太利に大聲樂家の傑出を思へば、日本語と伊太利語の發音上の類似、日伊兩國の地理的類似とが相一致して、日本人の聲樂將來は推斷し得らるべく考へられます。

處で、翻つて日本音樂を顧みますると、其旋律に於ては自づから日本風景の美と一致して、一種云ふ可からざるの妙を有して、泰西音樂に求め難い長所が存して居ります。

然るに惜むべきは日本音楽は音域が狭い事でございます。日本音楽に就て愚見を無遠慮に申述べば、富本より清元、清元より常盤津へ移つたものなさうですが、其原ある富本の如き、寧ろエキस्पレーションの優越せるを認むべく、また新内節の中に特種の美音が存し居ります様に思いますが、長唄に至つては裏聲(頭聲)なく、腹聲のみに重きを置く事、謠曲と異あらざるは残念な事、かくて自づから不自然ある聲の使用を奨励する過失を犯して顧みず、器樂聲樂共に和音の妙を欠きつゝあるのです。

換言すれば、色の配合に苦心を欠く譯で、色の美は一目して美ある色のみを集めて成るものでなく、素人眼には汚あく見ゆる色も、他の色と配合して、甫めて特種美を組織すると同じく、音楽も雑多ある音の配合より美音が成立するは、恰かも此頃の「香りの會」が香合せを奨励しつゝ、特種香料の發見に従事するも同じ道理にて、あらゆる音の相合すればこそ、妙音が得らるゝのですのに、日本音楽には一般に音域狭く、

和音と云へば通例は八度音程(一オクターブ)、五度音程、四度音程位なものでございます。これは實に残念な事、音楽には國境の無いもの、ごうかして、あれは外人の音楽、これは日本の音楽杯との偏見を捨て、他より優越せる旋律ある日本音楽をして、世界的に發展せしむる様、皆様と共に祈り度いと存じます。之れは決して不能で無い事、此風光の美を有し、元來が音楽能のある日本人の事、目下の所謂泰西音楽をして、これを泰西音楽杯と名稱する事なき時代の到來を呼び迎へ度いと存じます。これは手を懐にして、待つ譯には行かず。此の音楽の方面にも鎖國念を捨て、進取的方針を取りつゝ向上し度いと存じます。これには歌劇の公演杯は最上の方法で、此の爲め私も舞臺の上に立つ事を辞せぬ次第とあつたので、これが亦此の書を公にする動機ともあつた譯でございます。ですが、ごうもまだ目下の所謂泰西音楽は、泰西繪画程、我邦には普及せられて居らぬので従つて本邦人が油繪や、泰西式水彩畫に對して抱く理解

の方が、泰西音楽に對してのそれより普及してをる爲め、自づから其鑑別力にも逕庭があり、泰西音楽と云へば、廣告屋のブカブカドンドンの如く認められて居る間は、到底前述の希望は現實に接近し來ない譯で、どうか、私は恰度どの裏長屋にも、新聞社でお正月に御發行にある泰西式石版書が見らるゝ様に、泰西式音楽も、何れも様の御家庭に一般的に普及せらるゝ様にあれかしと祈り度いと存じます。

泰西的音楽は決して學校教師の一職業まで終るべきものでなく、各人、各家庭、各村、各都市、否大ある國家の美術とあらねばならぬもの、して之れが六ヶ敷かと云へ同化力に富み、風光が音樂的で、質が音樂的に出來て居る我が國の事、屹度近き將來には、云ふに云はれぬ美事を音楽が生れて來るは請合で御座います。

かく之れを請合ひ得るの道理ありとすれば歌劇の將來も知るべき事で、必ず成功して、而かも世界に誇り得る効果が生れ來るは期待し得べく、要は時の問題で、云ふ迄

もあく一氣呵成では出來ぬ事、出る芽を踏まずして養へば、何年后かには若葉を生し、また何年目かには花が咲き、更らに何年目かには實を結び、其后何年かを経れば、其の實の調理法が発見せられ、日本人の口と胃に満足せらるゝものが出來やうと存じます。但し何年間を要するかは、努力如何の問題あると同時に、如何に歴史を残しつつ進み行くかの問題です。そは歴史なき一切は價なきが爲めで、寧ろ早熟は難有くいかも知れあいではありませんか!

偕て終りに申述べねばならぬと申すは、此書を公にするに當りて、申す迄もあく私は此の材料の集輯、口述等に勉め、速記の出來た后ち、これを通讀致しまして、樂譜に戴つて居る歌句等と對照して見、それから若手の手を入れたのでありますから、此書を公にし得たのは私に材料を供給せられたる内外貴婦人紳士及編輯に助力を給はりた方々の御恩は決して忘れぬ處でございます。

世界のオペラ 著者の告白

これを爰に申述べて、以上の恩人様方に御禮を申述つゝ、私の此書に對する不行届を御詫致します。

明治四十五年四月

柴田環

注 意

○村松

△ 歌劇の何れを先きにするも全し事あれば、作者別と致しました。假令へばグルツク作の中にはオルフォイスあり、イフヒゲニイ、イン、アウリスあり。ウエーベル作の中にはオペロンあり、フライシュツツあり、マイヤーベル作中には亞弗利加女あり、豫言者ありと云ふ順序に致して置きましたから、作曲家の名に依りて其作の御見出しを願ひます

△ 作曲家、作歌者、登場人物には何れも原名を付して置きました。原名が無いと御不便が多いと存じましたからです

△ 歌劇の表題も能ふ限り譯語を付しました、假へばコシ、ファン、トツテをば、「女は皆んかかうした者」坏と譯して置きましたが、これも原名の必要がございますから、原名を附記して置きました

△ 男聲高音部とか、女聲中音部とか記しますと、余り字數が増加しますので、左の

世界のオペラ 注 意

世界のオペラ 注意

如き略語を用ひました

- 一、男聲高音部 Tenor (男高)
- 一、男聲中音部 Bariton (男中)
- 一、男聲低音部 Bass (男低)
- 一、女聲高音部 Soprano (女高)
- 一、女聲中音部 Mezzo-Soprano (女中)
- 一、女聲低音部 Alt (女低)

△集め得られた丈、作曲家の肖像を入れ、其自署を其肖像の下に入れましたが、此書に載せられたる全部作曲家の肖像は手に入りませんでした爲め、八九人欠けて居りますのは、爰に御詫致して置きます

△登場人物には、一々其役割とも見るべき聲部を付して置きました。これを明かにせぬと、興味を欠くと思ひましたからです。

Wolfgang Amadeus Mozart.

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

一千七百五十六年一月廿七日ザルツブルグ出生

一千七百九十一年十二月五日維也納にて死去

Wolfgang Amadeus Mozart
Salzburg 1756 - Vienna 1791

第一

フヒガロの婚禮

モツアルト作曲

DIE HOCHZEIT DES FIGARO.....MOZART

此歌劇はモツアルトが一千七百八十五年十二月より作曲に着手し、翌年四月甫めて完成したるものにして、
歌劇中此歌劇より優たるものなしと公認せらる。

初演 一千七百八十六年五月一日維也納

登場人物

アルマビバ伯爵 Graf Arnavia

〔男中〕

アルマビバ伯爵夫人

〔女高〕

スサンネ Susanne (伯爵夫人の侍女)

〔女高〕

ケルビン Cherubin (伯爵の小姓)

〔男中〕

世界のオペラ フヒガロの婚禮

マルセリネ Marcelline (戸締役)

[女中]

フヒガロ Figaro (伯爵の臣僕)

[男低]

バルトロー Dr. Bartolo (典醫)

[男低]

バシリオ Basilio (樂長)

[男高]

ドン・クルチオ Don Curgio (判事)

[男高]

アントニオ Antonio (園丁)

[男低]

ベルフビエン Barbichen (園丁の娘)

[女高]

場處 アルマビバ伯爵邸

第一幕

アルマビバ伯爵は夫人の侍女スサンネの優姿に迷つて居る。で、内心は反對である

けれど口癖の様に、スサンネは成る丈早くフヒガロと一緒にしてやり度いものだ、さうしたらばあの部屋を、二人の住居に遣らうと云ふ。スサンネは伯爵の心中をぢやんと覺つて居るので、伯爵が遣り度いと云ふ部屋へ戀人のフヒガロを連れて来て「御主人が私達に此部屋を下さると云ふには理由があるのです、御覽あさい、此部屋の位置と云ひ、構造と云ひ、ね、お氣が付きませんか、伯爵は私に思召があるんで、何その時に忍び込む積りのですよ」と語る。フヒガロは此言葉を聞いて、今更の如く自分達二人の結婚を急がうとする。伯爵の方では可成丈、此二人の結婚を延ばさせ様と企んで居る。伯爵の此の計畫に味方する者の筆頭には、典醫のバルトローと、戸締役のマルセリネが居る。マルセリネは好い年をして居乍ら、フヒガロに心を寄せて居るので、フヒガロとスサンネとの結婚と云ふ事に就ては、少々からず心を痛めて居る。典醫バルトローと此マルセリネとは醜關係があるのであるが、昔は兎に角、最

う年が年あので、手を切らうとバルトロは希望して居る。スサンネはマルセリネの心の秘密を知つて居るので、時々は「他人に取られぬうちに、早くフロガロと夫婦に成つて御覽あさい」杯と擲擲ふ。スサンネが例の曰く付の部屋で獨り居る處へ、這入つて來るのは小姓のケルビンである。

小姓ケルビンは仲々油断のあらぬ若者で、同じ伯爵家に居る園丁の娘ベルアヒエンと割あき仲と爲つて居る。處が今度其事が伯爵に見咎められたので、解雇せらるると言渡されたのである、それでは困るので、御主人御氣に入りのスサンネの許へ助けを求めに來たのである。其處へ折悪しくも伯爵が見へたので、ケルビンは周章狼狽して、椅子の蔭に隠れる。とは知らぬ伯爵、好機逸す可からずとして、盛んにスサンネを口説き落さうとする。ケルビンは椅子の蔭に在つて、此様子をすつかり見聞きして仕舞ふ。此前後の光景を物陰で居つた男がある。これは樂長のバシリオである。かうあつ

て來ては樂長は可笑しさに堪はず、大聲に「伯爵！椅子の横に行つて御覽あれ」と叫ぶ。伯爵はあにか知らぬが、この言葉を聞くと薄氣味悪くあつて、つと立つて、椅子に近付かうとする。スサンネはケルビンが発見せられては一大事と、伯爵の前に立ち塞がる吃驚したケルビンは其の間に、急いで椅子の上に飛び上り小さくあつて隠れ直す。スサンネは氣を利かして自分の衣服で椅子の上のケルビンを蔽ふので、伯爵は更に氣が付かない。別段變つた事も無さ相なので、一先づ安心して、何だ馬鹿と云はぬ計りの顔付で元の席に復す。と此時更らに「伯爵は結構なお小姓を有ちである伯爵夫人の侍女計りかと思へば、伯爵夫人御自身の特別の御寵愛を受けて居る小姓は幸福者よ！知らぬは伯爵御一人」どの叫びが聞へる。

是を聞いた伯爵は、園丁の娘の事件もあり、反すくも憎つき小姓と、一層の怒り、斷然ケルビンは解雇すると云ひ放ち、不圖椅子の上にフアリと掛かゝて居るスサンネ

の衣服を取除けると、之は仕たり、小姓のケルビンが「チョコチン」と其處に居る。伯爵の間の悪さは此上も無い、困つたのはケルビンの處分法。即刻の思ひ付きで早速十官に任命し、此儘此邸内に置いてはと云ふので遠方の隊付を申し付ける。と其處へ丁度フヒガロが來合はせて「何とお慈悲深い伯爵様」と皮肉を言ふ。

第二幕

伯爵夫人は良人の不嗜みを歎いて、様々と心を痛めて居る。と其處へ來るのはスサンネで、夫人の顔色を見て慰籍の言葉を掛けて居る。其處へ又フヒガロが來て、スサンネとの婚禮に就て伯爵の不決断に愚痴を並べた揚句、早く結婚するには如何して良からうと兩人の意見を叩く。其處で伯爵がスサンネに遇つて内々で話し度い事があるからと云ふて來たと、スサンネが物語るので三人は計略を案出する。その計略と云ふの

は。伯爵夫人は今夕或る親友と園内に私かに會合する約ありといふ意味の書面を匿名で伯爵の手許に送る事。又小姓ケルビンを女装させてスサンネと伴り、伯爵に會ひにやる事なのである。折柄ケルビンは士官辭令書を持參して、伯爵夫人に御覽に入れ、て挨拶する。夫人が其の士官辭令書を手を取つて見ると、任命者の署名捺印が無い。夫人は此辭令書も前掲の計略の何かの道具にある哩と思ひつゝケルビンに女装すべく命じ、愈々女装の試験を爲て見る。處へ伯爵が來て戸を叩く。一同は此不意の來訪者に驚いて、ケルビンは夫人の部屋に、スサンネは窓掛の後ろに隠れる。處が夫人は大狼狽をしてまごまご爲る。と戸口では伯爵が氣を苛つて「早く早く」と叫び乍ら激しく戸を叩く。けれど夫人は未だ開けやうとせぬので、伯爵は怒つて戸を壊はす道具を取りに行く。夫人は又驚いてその跡を追ふ。スサンネは此隙にケルビンを逃がさうとするが、注意深い伯爵の手に依つてスサンネの部屋に通ずる扉は錠を下ろされて居る。

ケルビンは仕方無しに、窓から飛び下りて庭へ逃げる。その途端に植木鉢を壊す、間もなく伯爵夫妻は出て来る。夫人はケルビンの逃げたの知らぬ故、伯爵にケルビンが隠れて居ると白状する。で伯爵は大に怒つて戸を開けて見ると、思ひきやスサンネが居る。伯爵は夫人に一抔喰はされたと思ひ、自分の粗忽を詫びる。此處へフヒガロが来て婚禮の準備を急ぎ度いと云ふと、伯爵は、婚禮杯は如何でも良い、それよりか匿名の手紙は如何した事由だと訊かれるので、フヒガロ甚だ困却の體である。處へ出て来るのは園丁のアントニオで、何者か知れぬが、窓から飛び下りて伯爵秘藏の植木鉢を破壊したと告げる。フヒガロは當意即妙、「それは私だつたのです」と取繕ふと、アントニオは更に例の士官辞令書を差出しながら、これが窓際に落ちてあつたと告げる。フヒガロの頓智も再び此の難問には殆んど閉口して「それも私がつい落としたので」と胡魔化さうと爲るのを、伯爵は「お前がそんなものを持つて居る筈がない」

とて承知せぬが。併し窮すれば又通ずる事もある例へで「御疑ひは御尤もで御座います、實際を申し上げます、此證書は伯爵閣下の御捺印が欠けて居りますので、私から閣下に改めて御印を頂いて呉れど、ケルビンから依頼を受けまして、それを預かつて懐中致して居つた次第なので」とびくびく者で可成り苦しい辯解を爲る、此時、戸締役のマルセリネは、樂長のバシリオを伴つて這入つて来て、フヒガロが自分と結婚の約束をしたのだから、何卒伯爵の御盡力で此の縁を結んで呉れ、と伯爵に願ふ。バルトロとバシリオとは此事は我等証人ありとマルセリネの肩を持つ。之れを聞いて伯爵は稀有の幸と、それではフヒガロには二人の婚約者があるのだから、詳しく調べる必要があるからと、フヒガロの待ちに待つて居るスサンネとの婚禮は又延期せらる。

第三幕

スサンネは伯爵夫人と相談の末、伯爵と秘密會見をする事にある。

「貴郎と私の一件は巧く行きまじよ」とフヒガロにスサンネは耳打ちを爲る。と此を小耳に夾んだ伯爵は大に怒り、偶々マルセリネがフヒガロと夫婦約束を爲たと云ふのを幸、二人を一緒に爲せればスサンネは嫌でも自分の手に入る譯だと一人で恐悅がつて丸で仇討でも爲た心算で居る。處がマルセリネ一件に就て段々調べて見ると、フヒガロは未だ幼小の折りに、誘拐者に連れて行かれた者で、その眞の両親と云ふのはバルトロとマルセリネであるといふ事が分かる。一方では伯爵夫人はスサンネに智慧を附けて、伯爵との會合は嬉しいとの返事を認めさせて、伯爵に渡させる順序にする。

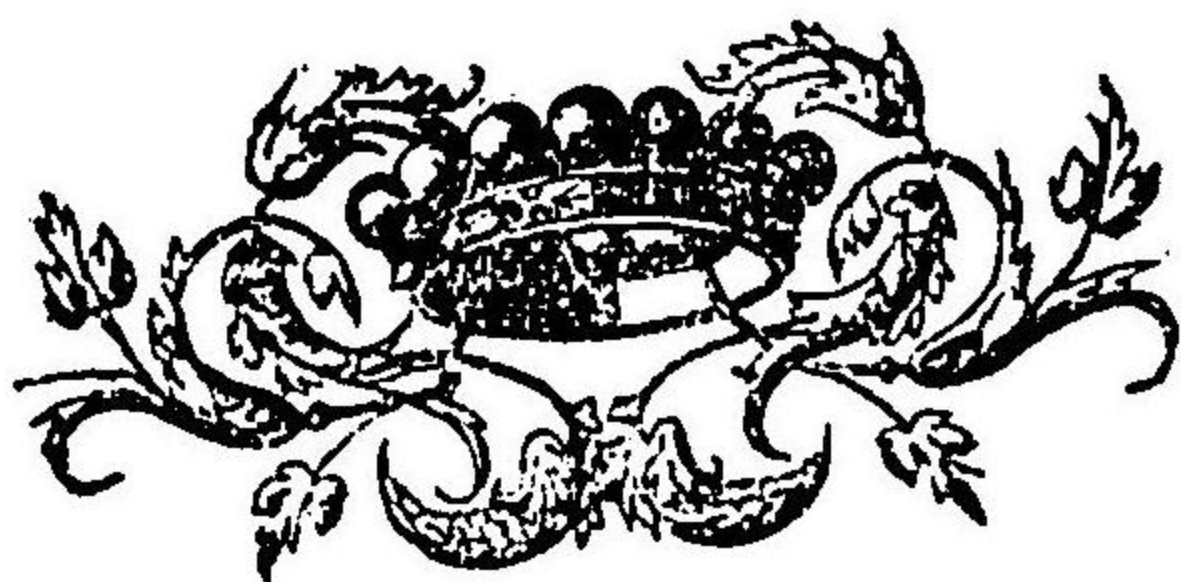
此處で伯爵領地内の村娘等が合唱しつゝ伯爵夫人に薔薇を捧げる賑やかな女行列が来る。ケルビンも變装して此等の村娘等の仲間に入つて居ると、其處へ伯爵と園丁のアントニオが来るが、流石アントニオは眼が早い。ケルビンの變装を見て取つて、その傍に近寄りケルビンの冠つて居る婦人帽子を脱がせて、士官帽を被らせる。又スサンネは伯爵から花を貰ふ機會を利用して、伯爵夫人に書せられた例の手紙をソツト伯爵に手渡しする。

第四幕

夜は闇の帷帳を以て伯爵家の庭園を取巻いて居る。園丁の娘ヘルフヒエンは夜の静寂に憧れて、庭の中を彼方此方と彷徨つて居たが、不圖人聲がするので、亭の方へ身を隠す。其處へ樂長のバシリオ、典醫のバルトロ及びフヒガロの三人が来る。又伯

伯爵夫人の御伴でスサンネも来る、此兩人は互に衣服を取替へて着けて居る。マルセリネとケルビンも此處へ来たが、人影を見て、亭の方へと行く。最後に出て来るのは伯爵である。伯爵は婦人等が變装して居るとは知らずして、自分の夫人をスサンネと思ひ込み、色々様々に優しい言葉や、甘たるい文句を並べて口説落さうとする。かゝる處へフヒガロは物陰から現れて、伯爵夫人に變装して居る自分の戀人スサンネを、それと承知し乍ら、態と押かひ半分に口説く。スサンネはフヒガロが夫人と自分とを取違へて、こんな事をするのだと思ひ、不快に感じて散々にフヒガロを罵る。フヒガロも仕方無く、スサンネの足下に躓いて謝罪する。と是れを見た伯爵は不届かフヒガロ奴が自分の妻を口説くと怒り、嫉妬を起して人々を呼び集めんとする。伯爵の權幕に驚いたスサンネは例の亭を目掛けて逃げ込むと、伯爵は前後の考へも無く、無理に亭の扉を押し開けると、中からは先刻の連中がぞろぞろと出て来る。と、よく見れば

自分の妻と思つて嫉妬した本尊はスサンネで、反對にスサンネと思つて口説いたのは自分の夫人であつた事に合点が行く。かうあると流石の伯爵も閉口して「天の使よ我れを許せ」と唱ふ。そして幕にある。



第二

女は皆んなかうしたもの

モツァルト作曲

COSI FAN TUTTE..... MOZART

此の喜歌劇は一千七百八十九年作曲に着手したるもので、モツァルト傑作中俗受の少なかつたものであつた爲め、屢々改作を試みたものはあるが、デズリマン Devrien の改作したるを最上とする。併し之は歌句上の問題でモツァルトが其累を受けたと云ふに過ぎぬ事である。他面に於て此改作の爲め、モツァルトが此劇中に現はるゝ人物に與へた特殊の性格は全く破壊せられ居つたのである。是が故に近頃獨逸ミニオンヒエンに於て原作通りを演じて大喝采を克ち得た機会として、目下原作通りに演ぜられて居る。

初演 一千七百九十年一月二十六日維納也

登場人物

フィオルチリギ Fiordiligi (ドバベルラーの姉)

〔女 高〕

フェルランド Ferrando (士 官)

〔男 高〕

ドバベルラー Dorabella (フィオルチリギの妹)

〔女 高〕

グリエルモー Guglielmo (士 官)

〔男 中〕

アルフォンゾ Alfonso

〔男 低〕

デスピナ Despina (前記姉妹の女中)

〔女 高〕

第一幕

此處はナボリのさる珈琲店である。明るい華やかさ燈火の下で老若男女種々様々の人々が愉快氣に盃を擧げ又は談笑に時を移して居る。中に二人の士官フェランドとグリエルモーとは意固地者のアルフォンゾと賭を爲る。

其の賭といふのは婦女の貞操問題に就てある。

世界のオペラ

女は皆んなかうしたもの

兩人の士官はフィオルチリギ、ドバベルラーといふ姉妹と婚約を結んで居るのであるが、此女は果して貞操正しい者であるかと云ふ事が問題なのである。勿論士官は自分達の戀人は貞操堅固此上無しと信じて居るのであるから、飽くまでその信念を主張すると、一方アルフォンゾは「全體女といふ者には貞操は無い」との説を持して居るので茲に約束を定め、士官は二十四時間の中はアルフォンゾの云ふが儘にある事、又アルフォンゾはその時間内に必ず彼の兩女の不貞操ある所以を證據立てると云ふ賭事が始まる。

双方共多額な金を賭ける。そして士官兩人は自分達が勝つた曉には、克ち得た金で戀人ある姉妹の爲に盛んに祝宴を張らうと語り合ふ。舞臺は一轉し海邊庭園の場とある。

フィオルチリギとドバベルラーの兩人が、戀人の來るのを待つて居ると、アルフォ

ンゾが來て、フェランドとグリエルモとは急に戦地に赴く事とあつたと告げる。姉妹は余まりの突然の事に抱き合つて歎き悲しむ。處へ一隊の兵士を引率して、かの兩人の戀人たる兩士官が來て、姉妹に別れを告げんとて、悲しみの眼を露るませ居る兩女に近付く、兩女は別を惜みて泣き崩れる。

兩士官は兩女の態度を見て心中占めたりと大喜び、併し表面にはさも別れを辛さうに粧ふて、急いで海岸に繋かれた小舟に乗り移る。

一方アルフォンゾの活動は是から始まるのである。

彼は姉妹の侍女デスピナに幾何か撥ませて、自分の手先に使はうとする。元來が召使ひの下女の事、金の顔を見ては否とは云はあい。そこでアルフォンゾは戀人の兩士官をアルバニア人に變装せしめ、姉妹達の未だ去らぬ此の海邊の庭園へ連れて來る。そして此の變装ある兩アルバニア人をデスピナに世にも稀れある親切な紳士として紹

介をする。

此の假裝アルバニア人兩名はアルフォンソの命通りに、言葉巧みに女の心を蕩かさうとする。されども姉妹は仲々に心を動かすべくもあかつたのである。

第二幕

姉妹の部屋である。デスピナは姉妹を説いて居るのである。「女が貞操杯を眞面目腐つて守る必要が何處に御座いませう。女と男も同じ人間、男は如何あ不身持をしても見遁がして貰へるのに、女が少しでも氣儘をすれば、貞操なき者と云はれる。不公平もまた甚だしいことではありませんか」杯と甘く姉妹を誘惑する。其處へ例の假裝アルバニア人は顔を出して兎や角と姉妹の心を動かす。舞臺は復た以前の海岸の場とある。

假裝アルバニア人兩名はアルフォンソ指揮の下に頻に姉妹を口説く。と段々女の様子は變つて来る。何んだか直ぐにも好い返事も仕兼ね間敷くある。面白い哩と腹の中を手を拍いて居るのはアルフォンソであるが、アルバニア人に假裝して戀人兩名の心を試験する兩士官は氣を揉み始め、苛つ心は燃へる様にある。けれども廿四時間と云ふ約束の時間は未だ切れぬから、アルフォンソと六ヶ敷い顔付で睨め合つて控へる。

舞臺は又變つて。今度は入口の多い部屋とある。

假裝のアルバニア人兩名は姉妹に向つて結婚約束書に署名を迫る。侍女のデスピナはアルフォンソの依頼で、公證人に變装して、結婚約束書を朗讀する。姉妹が愈々署名せんとする其時アルフォンソが慌てて入りて来て、フェランドとグリエルモとの兩士官歸國の旨を報ずる。一同駭然として假裝アルバニア人兩名も假裝公證人も急いで姿

世界のオペラ 女は皆んなかうしたものを隠す。女は只驚ろいて周章狼狽する計り。其處へアルバニア人の扮装を解いて、兩士官は入つて来る。兩人共表面には快活を装つて居るが、心中の疑惑と煩悶は去る道理がない。女も女で波立つ胸を押鎮めて、嬉々として各々の戀人を迎へるのである。然るに例の結婚証書が端なくもグリエルモーの手に入るので、姉妹の驚愕狼狽は其極に達する。戀人ある兩士官の脚下に跪き、只管自分等の罪を懺悔する。士官達も自分等の爲に戯れの余りに過ぎたのを悔み、茲に姉妹の謝罪を容れて兩び元の様に互に手を取り合つて目出度とある。

第三

ドン・ジュアン

モツアルト作曲

DON JUAN.....MOZART

曾て詩聖キヨエター (Goethe) がシマリア (Schiller) に宛った書面に「歌劇に就ての君の希望は此のドン・ジュアンに於て始めて充たされたものであらう」とまで賞讃して居る。以て其價値を知るべしである。

初演 一千七百八十七年十月廿九日英國、ブラーグ

登場人物

ドン・ジュアン Don Juan

〔男 高〕

武士團々長

〔男 低〕

世界のオペラ

ドン・ジュアン

世界のオペラ ドン・ジュアン

ドンナ・アンナ Donna Anna (武士團長の女)

〔女 高〕

ドン・オタービオ Don Ottavio (ドンナ・アンナの婿)

〔男 高〕

ドンナ・エルビラ Donna Elvira (ドン・ジュアンの見捨し女)

〔女 高〕

レポレロ Leporello (ドン・ジュアンの下僕)

〔男 低〕

ツェルリネ Zerline

〔女 高〕

マゼット Masetto (ツェルリネの婿)

〔男 低〕

○時代十七世紀の中頃

○場所セビラ

第一幕

戀の冒險家ドン、チュアンは今宵も例の女釣りに時を忘れて出歩いて居る。下僕の

レポレロは獨りで此暗い夜、主人の歸宅を待つて居る。程無くドン、チュアンはドンナ、アンナと云ふ美しい婦人に手を押へられ乍ら、出て来る。ドンナ、アンナは恨みて唱ふ。「君よ、何處へ去りますも、我が心、我が軀に宿れる中は、君が無禮は忘れじよ、ああ恨めしの君ある哉」云々。

アンナの父ある武士團長は、其娘の聲に此處に飛び出す。ドン、チュアンは驚いて逃げ込むが、己が愛娘を誑らんとするドン、チュアンを懲らさんと、武士團長は決闘を申込み。然るに、不幸ある父は其の憎める者の爲に、却つて刺される。ドン、チュアンは下僕レポレロと共に何處へか行先を暗ます。

ドンナ、アンナと其婚約者ドン、オタービオとは其場に臨む。父の最期を見てドンナ、アンナの愁嘆は壁ふべくも無い、泣き崩れて氣絶する。茲に兩人は父の仇を尋ねて復讐せん事を誓ふ。

世界のオペラ ドン・ジュアン

此處で「仇討」の二部合唱がある。舞臺は變つて街路とある。ドン、チュアンは懲りもせず、尙も女釣りの冒険に就てレボレロと話し合つて居ると、其處へ来る容姿優しい女がある。心の中に今度こそはと念じながら、漸く近寄つて其女の顔を見れば、曾て見捨てた戀人の、ドンナ、エルビラである。ドン、チュアンは驚く、エルビラはドン、チュアンを罵つて其無情を責める。其場に居兼ねて、レボレロを置いてドン、チュアン獨り脱れ去る。レボレロは女に向つて主人の浮氣は今まも巳まぬ旨を告げる。エルビラは益々憤怒する。

再び舞臺は變る。此處はドン、チュアンの別荘に程遠からぬ田舎道で、恰も彼方からは婚禮の行列華々しく練つて来る。戀の冒険者ドン、ジュアンと其下僕レボレロとは此處へも顔を出す。行列の先頭に新郎のマセツト、と並んで来るツェルリネの姿に此の冒険者は例の謀反氣を起すのである。邪魔にあるのは彼のマセツトと、氣を苛つて

居るのを早くも見て取つたレボレロは、セルリネを何とか爲て欺かうとする。其處へ折よくドンナ、エルビラが現はれたので、誘惑は成功せぬのである。

折柄ドン、オタービオとドンナ、アンナが出て来てドン、ジュアンが居るのを見るや、父の仇敵は此ドン、ジュアンに非ずやと疑念を持つて居るが、未だ證據が無いので手を下ろす事が出来ずに居る。と、ドンナ、エルビラが「偽善者を警戒せよ」と叫ぶので、ドンナ、アンナは益々ドン、ジュアンが父を殺したものと思ふの念を固くし而して、オタービオに是非復讐して呉れと頼む。此間に脛に疵持つドン、ジュアンは風を喰つて、何處へか去る。他の者が行き過ぎるや、ドン、ジュアンとレボレロの兩人は再び現はれて、今度相手に爲る女の誘惑法を相談する。

何も知らぬ新郎マセツトは新婦セルリネと並んで来る。ドン、ジュアンは時こそ來れりと、セルリネに近寄つて、自分が宴會を催すから是非參會せよと云ふ。

マゼットは是を見てセルリネの心に疑惑を抱き始める。でセルリネが如何するかと、自分は其場を去り、物蔭に隠れて様子を見る。ドン、チュアンは我が時至れりと、得意の技を奮はんとする。此方はマゼット、堪え兼ねて其場に飛び出し、大に怒つて今にも跳り掛らん計り。ドン、チュアンは失策とは思ふが即座の機轉で、其場は甘く胡魔化する。

ドン、チュアンは愈々一大宴を張る事に成る。

ドンナ、エルピラ、ドン、オタービオ、ドンナ、アンナの三人は假面を装つて出で来り何れもドン、チュアンの面の皮を刺し呉れんと心に期して居る。折柄ドン、チュアンの城中から名高いメニユエット曲が響いて来る。レボレロは此處へ来て、主人の名で此三人を宴會に招待する。

此處に亦有名な『假面』の三部合唱がある。

舞臺一轉して城内の舞踏室と成る。ドン、ジュアンはセルリネを他の室に連れ行かんと、拒み争ふを、無理にも己が意に従はせんとするので、セルリネは驚いて悲鳴の聲高く救助を求むる。

何事が起つたのかと前の假面の三人が来ると、飽く迄鐵面皮のドン、チュアンは狼狽して居る下僕のレボレロに向つて「此不屈者が貴婦人に對して何を爲居つたか。賓客方の御愉快を妨げた無禮者奴、此分には置かぬぞ」と叱つて置いて、自分は何と爲て居る。併し客人等は承知せず、ドン、チュアンを許さずと迫るので、最早斯うあつてはと、ドン、チュアンは腰ある劔を引抜き此場を辛うじて脱け去る。

第二幕

望臺の有るドンナ、エルピラの邸宅が道路の一方に聳つて居る。

再三の失敗に愈々氣を苛ちつゝ、戀の冒險家ドン、チュアンは此度はドンナ、エルビラの女中を誘惑せんと圖る。此の計畫を果たすに就ては、自分の姿では都合が悪いので、下僕の風姿に扮する。下僕ある彼のレボレロは宴會の夜、ドン、ジュアンに罵られたので、あれは狂言とは思ひながらも、猶解けやらぬ塊が胸の底に在るので憤慨して居たが、御主人の事とて仕方無く、心を鎮めて居る。時しもドンナ、エルビラは望臺に現はれ、街路に居るドン、チュアンを俯瞰す。ドン、ジュアンは此奴が居ては仕事の邪魔と、貴女の事は忘れて居るのでは決して無いから、悪く思つて呉れぬ様に」と言葉巧にエルビラに向つて説く。エルビラも此言葉に心動き、ドン、ジュアンの願望通り望臺を去つて了ふ。其故此ドン、ジュアンを裝つて居るレボレロは何處迄もドン、ジュアンと成り済まして、ドンナ、エルビラに對し、忘れて居あいと言ふ證據を示さなければ成らぬ様に成る。

此方は本物のドン、チュアン、エルビラの女中の事計り考へて居る、で計畧の實行に取り掛らうと行き掛けると、マセットは二三の百姓と共にドン、ジュアンを捕へんと出て来る。併しドン、チュアンは下僕レボレロに扮して居る爲め、此百姓等を巧みに欺いて了ふ。百姓達は瞞着されたとは知らず、本者のドン、チュアンを眼の前に据わて置き乍ら、他の方面へと探しに行く。

場面は變つてドンナ、アンナ宅の薄暗い玄關に成る。此處へドンナ、エルビラとドン、ジュアンに扮したレボレロが出て来る。レボレロは逃し度いのであるが、四邊は暗く勝手を知らぬ事とて困り切つて居る。此時ドン、オタービオがドンナ、アンナと松火を撃つて出て来る。レボレロは顔を見られては一大事を脱れ去らうとするを、然うは遣らじと、ドン、オタービオが前に立塞がればドンナ、アンナも力を協せ取押へんとする。然るにドンナ、エルビラは此レボレロを眞のドン、ジュアンと信する爲め、兩

人に向つて命丈はと頼む。

レボレロも一生懸命「免して、免して」と云ひ乍ら隙を狙つて危うい處を抜け出る。

茲に舞臺は月下の幕場と變る。

轟々と立ち列あつて居る墓標、紀念碑は皆月光を浴びて蒼白く、物凄じい色に浴して

居る。曩にドン、チュアンの爲に創傷を受け亡き人の數に入つた武士團長の墓碑も、

此の墓地の中に在る。

此處へドン、チュアンとレボレロが出て来て最近の戀の冒險に就て面白氣に語り合ひ

乍ら、時々洪笑する。此時怪しき叫び聲が二度迄聞こへる。兩人が驚いて振返つて見

れば、眼前には武士團長の墓碑が聳ね立つて居る。ドン、チュアンはレボレロに「此

墓碑には如何ある文句が刻んで在るか讀め、而して又此の墓碑を晚餐に招待しやう」

と云ふ。是を聞いてレボレロは身震ひして恐れる。結局愈々此石像を招待する事と成る。

纏て兩人は石塚を乗り越して去る。

兩人の影が見えなく成ると今度現はれるのは相思の仲あるドン、オタービオとドンナ、

アンナである。青春の血に燃ゆるオタービオの心は優しく亦勇ましい。扱てアンナに

向つて戀に父の横死を慰さめ乍ら、切あき自分の胸の想念を訴へて、早く約束通りに

結婚して呉れる様にと頼む。

然るに可憐のアンナは横死せる父を思ふの切あるより、戀人に先づ復讐の事を語る。

此處で、「あら悲し、あはれ戀しの胸ある君。」と云ふ歌があつて舞臺一轉。

綺羅を盡し華美を極めたドン、チュアン邸内の一室。銀燭の光りは燦として室内の器

什を凡て夢の中にある物と照らして居る、此處にドン、チュアンは愉快氣に客を待つて

居ると、ドンナ、エルビラが来て、以前の優しい心に立還つて再び嬉しい日を樂しま

せて呉れと訴へるが、「其様を事聞く耳有たぬ」と計りのドン、チュアンの態度に、

ドンナ、エルピラもほとほと愛想が盡き、いざ立ち去らんとして、戸外に出づるや彼女はキヤツと叫ぶ。レポレロは何事の起りしやと、戸口の方を見遣れば驚ろくも道理、其處には彼の武士團長の墓碑が立つて居るのである。ドン、ジュアンは斯く見て「招待したから来たのだ、早く此方へ入れる様に」と命するが、兩人は只慄へ戦く計りあので、ドン、チュアン自ら立つて扉を開いて「墓碑」を迎へ入れる。

墓碑は室内に進み入るや否や「罪人よ、早く悔改めて神の道に入れ。」と一喝する。大膽無類のドン、ジュアンは「何で改心の必要が有る?!。否、否、否!と言放つ。

此時奔雷般々として轟き、驚雷煌々として閃めき忽ちに室は割れて、ドン、チュアンは其の裂隙の中に陥るよと見る間に、大地の底へと吸ひ込まれ行く。此處へドン、

オタービオ、ドンナ、アンナ、マゼット、ツエルリネ及びドンナ、エルピラも現れて「速に罪人を懲罰せよ」と叫ぶ。レポレロは「あゝ、我が主人は神の憤怒に觸れて其

の刑罰を享けた。」と云ふ。

ドン、チュアンは斯くて深く深く奈落の底へと落ちて行く。



第四

王宮よりの救助 モツァルト作曲

ENTFUEHRUNG AUS DEM SERAIL..... MOZART

此歌劇は三幕物で作歌はステファニー (Stephanie) の手になるものである。此作に於てモツァルトはその地方的色彩を巧に描寫し登場人物の個々ないとも麗はしく音樂的に活躍せしめてなる。

初演 一千七百八十二年七月十二日維也那

登場人物

セリイム Selim

〔男中〕

コンスタンツェ Konstanze (ヘルモントの妻)

〔女高〕

フロンデ Blonde (コンスタンツェの侍女)

〔女高〕

ヘルモント Belmont (コンスタンツェの良人)

〔男高〕

ペドリロ Pedrillo (ヘルモントの下僕)

〔男高〕

オスミン Osmin (セリイムの別荘監督)

〔男中〕

第一幕

若いヘルモントは戀人のコンスタンツェがセリイムに捕へられ、その王宮に監禁の身とあつて居るのを、如何にもして救ひ出さんものと思案に暮れつゝ、此處セリイム王宮前の廣場を右往左往して居る。美しいコンスタンツェはセリイムの云ひ寄りに應せぬ爲め、今王宮に囚はれて呻吟して居るのである。此處にセリイムの別荘監督オスミンに逢ふので、夫れとあくコンスタンツェの近状を知る方便ともあるべき事共を尋ねる。併し回々教徒たるオスミンはヘルモントが基督教徒たるの故を以て之に答へない。で、ヘルモントは再び考へ込んで居ると、其處へ偶々來かゝるはペドリロで、此男は

世界のオペラ 王宮よりの救助

ベルモントの下僕であるが、これもセリイムに囚はれの身とあつて居る者である。兩人は顔を鳩めコンスタンツエ救助に就て計畫を立てる。

セリイムはコンスタンツエの手を取り家來の者共を伴れて、今ま此處邸前の廣場へ來る。そして日常の如く、コンスタンツエの胸を掻きむしる様を言葉で吐く。コンスタンツエは之を怒つて其場を去る。時分はよしとペドリロはセリイムの傍に進み出で言葉盡して、セリイムをして、ベルモントを建築長に雇入れしむべく説服する。旋曲りのオスミンは此處でも亦ベルモントを異教徒の故を以て之に異議を唱ふるが、結局はベルモントの意通りにある。

(48)

第二幕

オスミンはコンスタンツエの侍女フロンデに戀して家來は主人の云ふ事は何事とあく

服すべきものと威しつゝ口説く。

家來の男勝りのフロンデ、何條オスミンあごを恐れやう。飽迄其意に應せぬのである。

此時コンスタンツエが來ると、その後を獸の様をセリイムが附いて來る。此處でもセリイムは頻りに口説く。コンスタンツエ依然として拒絶する。

先刻退場したフロンデはペドリロと共に此時再び登場し來り、此處でペドリロはフロンデに逃走の企畫を物語る、フロンデが、オスミンの意に従がはぬも道理、フロンデには此通りペトリロといふ意中の人が有るのである、兩人はオスミンを欺いて酒を呑ませ、その泥酔して前後不覺に陥つて居る間に、此企圖を實行する事に決める。

(49)

第三幕

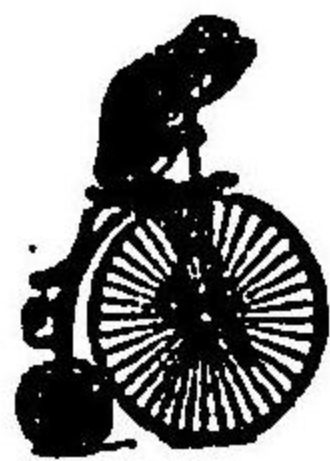
ベルモントはコンスタンツエの手を、ペトリロはフロンデの手を取つて、二組の可憐

世界のオペラ 王宮よりの救助

ある戀仲同志は番兵共の眼を掠めて首尾能くセリイムの王宮から落ち延びるのである。然るに宮中に此四人の姿を認められた者があつて、密告のあつた爲め、オスミンは逸疾く番兵等をして四人を追跡せしめる。

九死に一生の思ひで喜んで居る四人は、再びあの恐ろしい牢獄の様かセリイムの王宮に連れ戻されて直ちにセリイムの面前に引き据わられる。

然れども愛の力は鋼鐵をも透すこの例に洩れず、セリイムの胸にも解し得ぬ一脈の感慨が流れて、四人は茲に自由の歡喜を得るのである。



第五

魔法の笛

モツアルト作曲

Zauberflöte..... MOZART

此歌劇はシカネーデル(E. Schikaneder)の作にて、ベートホーベンの如きはモツアルトの作曲中にて此作程優美なるものは無しと嘆賞した。此作はモツアルトの辭世數ヶ月前に成りしもの「フィガロの結婚」「ドン・ジョアン」及び「魔法の笛」の三曲はモツアルトの最大傑作である。モツアルトの作曲が新く巧みなるに拘らず、シカネーデルの作歌は非難の聲無きにあらず、されど此人が多方面の各種人物性格を作曲家に交付したる功は永久不滅である。

初演 一千七百九十一年九月三十日奥國維也納

登場人物

高僧 サラストロー Sarastro

〔男 低〕

世界のオペラ 魔法の笛

世界のオペラ 魔法の笛

皇子タミノ Tamino

夜の女王 Koenigin der Nacht

パミナ姫 Pamina (女王の娘)

パパゲノー Papageno

パパゲナー Papagena

黒人モノスタートス Monostatos

三人の女(夜の女王の侍女)

三人の神童

其他僧侶、奴隸、臣下

場所 埃及

〔男 高〕

〔女 高〕

〔女 高〕

〔男 低〕

〔女 高〕

〔男 高〕

〔女 高〕

〔女 中 低〕

第一幕

老樹巨木森々たる密林中巖石土塊は磊々として何時何處より怪性の物の顯はれ出るとも判らぬ物凄さ。此處に皇子タミノは遊獵に來たのであるが、異形の怪物に追はれて氣絶して了ふ。處へ三人の覆面の女が投槍を提げて現はれ、異形の怪物を斃して去る。頓がてタミノは呼吸を吹き還へす。

折柄パパゲノーは「鳥を捕ふる者は我あり」と唱ひ乍ら出て來て、タミノに向ひ「汝を救つたは此俺だ」と偽を云つて恩に被せる。此時以前の三人の女が再び現はれ、パパゲノーの詐言の罪を懲す爲に、其口に錠を卸して了ふ。而してタミノには夜の女王の命令に依り、女王の娘パミナ姫の画像を預けて去る。タミノは「この面姿の如何に美しきよ」云々の獨唱を爲る。間もあく再び以前の三人の女出て來り、兇漢がパミ

世界のオペラ 魔法の笛

ナ姫を其母君より何處へか連れ去つた、由をタミノに物語りて去る。此處に夜の女王
(パミナ姫の母)は愁然として顯はれ失ひし愛娘を尋ね究め呉れよと、切ない言葉でタミ
ノに依頼する。於是三人の女又もや現はれ、タミノに「魔法の笛」を與へ、ババケ
ーには「魔法の鈴」を渡し、同時にババケノの口の錠を外しやる。尙此タミノ及びバ
バケノの兩人を援護する爲め三人の神童を附隨せしむる。

場面は轉じて贅を極めたる埃及式の部屋と成る。パミナ姫は辛ふじて捕はれより脱し
て逃げたるも、再び捕はられて此の部屋へ引戻され、其場に氣絶する。

黒人モノスタートスは窃窕花も恥ぢらふパミナ姫の倒れ伏したる艶姿を見て、恍惚と
して居る處へ、忍び足にてババケノが来る。不圖ババケノとモノスタートスは顔
を見合はせ打驚いて各々立ち去る。

ババケノが再び此處に来る時、パミナ姫は漸く甦へる。ババケノは姫に向つて「タ

ミノと呼ばれる丈夫が御身の母ある夜の女王の依頼を受けて御身を救ひに来られる」
と告げるので、パミナ姫はババケノと共にいそいそとしてタミノを捜しに行く。

舞臺は一轉して其背後と左右には、宏壯華麗ある伽藍の在る森林の場と成る。

皇子タミノは三人の神童に誘はれて登場。三人の神童はタミノに對ひ「如何ある場合
と雖も、言葉を吐かぬ様に」との命令を與へて去る。タミノは獨り勇んで森林中に分
け入り、彼方の三つの伽藍に這入らふと爲る、けれども扉を開き得ないで居る。處へ
此等の伽藍の中の一つある「知恵の精舎」の中より一人の僧侶現はれ出でタミノに對
し「高僧サラストローは魔法使ひでも無ければ、又暴君でも無い。パミナ姫を母君の
手より奪ひ去つたのは姫に幸福を配與せんが爲である、其方も賢人たらんと希ふから
ば、此「知恵の寺院」に入つてこそ其實を得られるのだ」と告げて去る。

タミノは再び獨りに成るので、パミナ姫を呼び出さんと魔法の笛を吹く。この時之に

應ゆるババゲノ一の鈴の音聞ゆ。タミノは其音の響きを頼つて行く。折からパミナ姫はババゲノ一に伴はれて現はれる。時しも黒人モノスタートスは數多の黒奴を引具して再びパミナ姫を捕へんと追つて来る。之を見てババゲノ一が魔法の鈴を高く振ればモノスタートスを始め黒奴等は忽ち魔法に感じ、歌を唱ひ手振足並面白く、拍子を取つて躍り出し、其儘何處へか去る。此處にサラストロー一現はる。パミナ姫は跪きてモノスタートスが妾に戀ひするの苦みより、免れんとて逃げたりと述べ、其罪を詫ぶ。これを聞きてサラストローは姫逃走の罪を免するも、姫に尙未だ自由は與へずと宣言す、然るに一面にモノスタートスはタミノを捕へサラストローの面前に連れ来る。かくしてモノスタートスはサラストローの恩賞に與らんと期せるに、サラストローはモノスタートスがパミナ姫に對して劣情を抱きたるを叱し、其罰としてモノスタートスの足の裏を七十度鞭打ちタミノとババゲノ一とを修道院へ送れと命ずる。

第二幕

椰子の綠葉、他に日影を洩らさぬ程の密林である。

サラストローはイジス(地の女神)、オリジス(日の男神)の神の信任し給へる僧侶等と共に、一座してタミノを聖堂に入るの可否に就て、互の意見を戦はす。其結果パミナ姫の母「夜の女王」は迷信に囚へられ、常々僧侶の聖教に従はぬ女性なれば、其味方たるタミノをば、聖舎に入れるは宜からずと決する。舞臺は轉じて、此處は墨を流した様空は物凄く、時折雷鳴さへ響き来る夜の伽藍の前庭である。

タミノとババゲノ一とは今修業試験を受けて居る。茲に二人の僧侶が出て來り「之迄の試験は通過したが、尙此先も一切口を利く事は相成らぬ」と警める。其處へ以前の

三人の女現はれ、此兩修業者に禁を破りて談話せしめんと誘惑す。タミノは誘惑には打ち勝てども、ババゲノーはタミノに注意を受くるに係わらず、遂々誘惑せられて談話する。

更に舞臺は轉じて寺院の庭園の場と成る。

パミナ姫は何の邪念も無く、亭の内に在つて華胥の國に遊んで居る。此時黒人モノスはタートスは此處へ亦忍び來つて、パミナ姫に接吻せんとして近寄る。其の時現れるのはパミナ姫の母、夜の女王で、眠れる其娘を呼び醒まして「パミナ姫よ速かに策を廻して高僧ありと云ふサラストローを殺せ、然らずば永久に自由を得る事は出来まい、又タミノの愛を受くる事も難くある」と告げる。モノスタートスは之を聞き益々劣情を高める、パミナ姫は無禮者と詰る、モノスタートスは大に怒つて、可憐のパミナ姫を刺し殺さんとする。此時サラストローは幻術を以て容易く之を救ふ。於是パミナ姫

はサラストローに妾が母に慈悲を與へ給へと願ふ。サラストロー此の願を聞き入る。場面は又變じて修行庵とある。

タミノとババゲノーとは導かれて此處に來り、又もや沈黙の行を命せられる。ババゲノーは此戒を破つて老婦人と假裝したるババゲノーと雜談する。茲に雷鳴轟き電光閃々と輝き、其瞬間にババゲノーの姿は消ゆ。

魔術の力で山海の珍味が兩人の前に現はれる、禁戒を守るタミノは振り向きもせず、只管に心の鍊磨に努めて居る。然るにババゲノーは速刻手を伸ばして此佳肴を味はう。其處へパミナ姫が來りタミノに向ひ「私の心も御察し下さい何故貴郎は其様に口をお利きにあらぬ？」と悲し氣に問ひ掛けるが、タミノは決して口を開かぬ。

舞臺更に轉じて莊麗ある大伽藍と成る。

大勢の僧侶達は此處に連あつてイジス、オリジスの二神を讃頌して居る。タミノは能

く其の戒を守つた爲め、聖堂へ伴はれる。パミナ姫は復此處へ来て生別の辞を述べ
るがタミノは猶ほ片言隻語をも發しまい。ババゲナーも亦此處へ来て勇み喜んで、高
聲に語り興じ、剩さへ酒欲しや女欲しやと云ふ。と此處に一人の老婆が出現するが
妖術に依つて俄然明眸皓齒の少婦に變る。之を見てババゲナーは恍惚として、忽ち煩
惱の心を起して戯れんとする。
更に舞臺は庭園の場と成る。

パミナ姫は、毫も口を開かぬタミノの心を解し兼ね、自分はタミノの心の底ある愛の
泉を汲む事は出来ぬ、と思つて失望落膽の極、自害せんとする。處へ三人の神童現は
れてタミノの許に必ず伴う事を約して、漸く姫の自殺を思ひ止まらせ、パミナ姫を
連れて退場する。

タミノは甲冑に身を固めた二人の武人に導かれて出場する。兩人の武人はタミノに

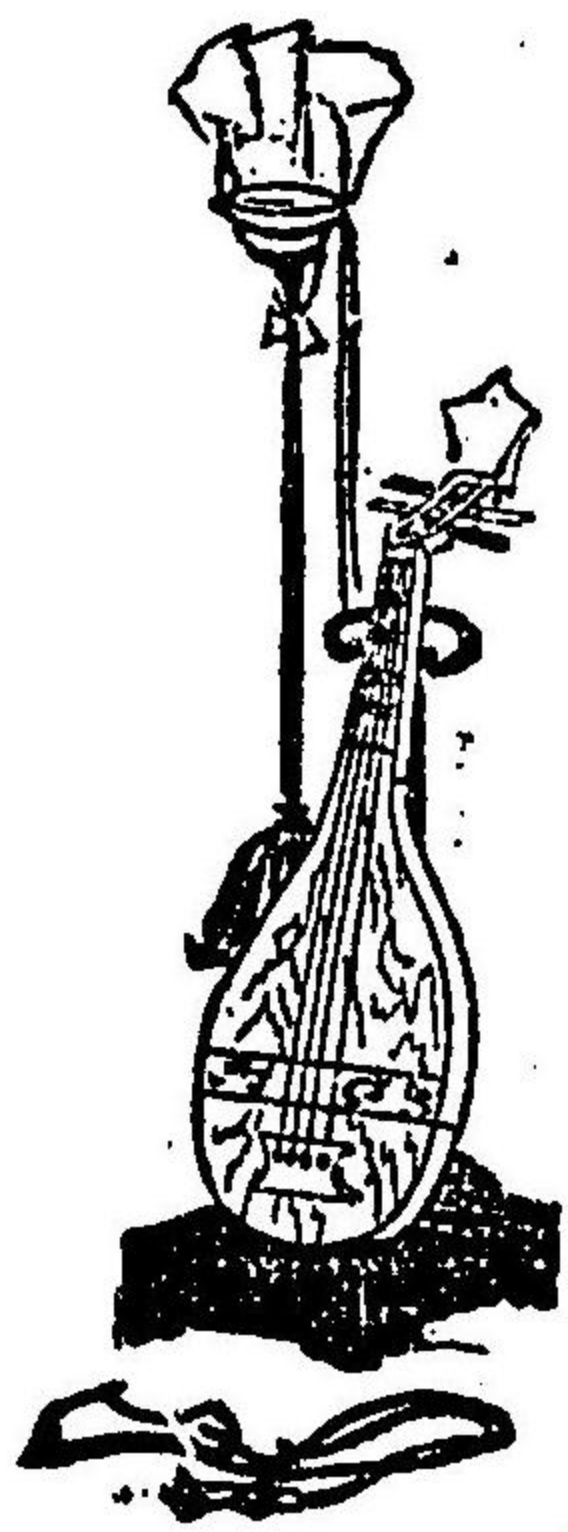
向ひて 此先が最も危険の境であつて、水火の中をも勇を鼓して潜り抜けねばならぬ
のであるが、此の難關を経て、初めて神々の恩恵に浴する事が出来ると告げる。折しも
パミナ姫は三人の神童より、タミノの愛は不變にて、彼女の爲めに苦しき試みを受け
つゝある事を聞き此處に「自らもタミノの苦しき試みの行程を共にしたい」と祈る、
此願ひは神に許されて、戀人兩人は互に助け合ひて、遂に流石の危険境も首尾よく通
り越し、此試験に及第する。

舞臺は轉じて以前の庭園の場とある。

煩惱兒ババゲナーは美はしのババゲナーの消え去つたのを歎き、絶望して果は自盡を
企てる、パミナ姫を救ひし三人の神童茲にも現はれ、ババゲナーが持てる「魔法の鈴」
を打振りババゲナーを呼び出す。

茲に「ババババ、ババババケナー」云々の二部合唱あり。

時しも夜の女王は三人の女とモノスタートスを引見して、戀姫を奪はれし憤怒の餘り、僧侶等に復讐せんと出て来る。すると折柄の大雷雨に天地も爲に覆らん計りと成る。夜の女王も力及ばず、一同逃げ去る。タミノ及びパミナ姫はよく神の禁戒を守りたる功により、聖堂にて多くの聖人より賞賛せられ結婚式は目出度く舉げらる。



第六

フィデリオ

ベートホーヴェン作曲

FIDELIO.....BEETHOVEN

二幕物なるが元來ベートホーヴェンは器樂の支配者たるが如き觀ある名人なるが、此フィデリオの曲に於てオーケストラをば全然シンフォニー式に處理し、而も聲樂上の力を制限する事がなかりしは、頗る賞賛せられて居るのである。獨逸歌劇中に於て此フィデリオは重要なものとして成つて居る。

初演 一千八百五年埃國維也納

登場人物

ドンフェルナンド Don Fernando (國務大臣)

[男中]

ドンピザロー Don Pizarro (監獄署長)

[男中]

フロレスタン Florestan (囚徒)

[男高]

世界のオペラ フィデリオ

世界のオペラ　　フィデリオ

レオノレー Leonore (フロレスタンの妻一名フィデリオ)

〔女高〕

ロッコ Rocco (看守長)

〔男低〕

マルセリン Marzeline (看守長の娘)

〔女高〕

ヤクイノー Jaquino (門衛)

〔男高〕

場所　　西班牙セビラ附近の監獄

第一幕

監獄内の廣場である。看守長の娘マルセリンが一心に仕事を爲て居る處へ、門衛のヤクイノー來り、頻りに思ひの丈を述べ、自分の妻に成つて呉れと云ふ。マルセリンは其愛くるしい眸を上げて、夫は何卒許してと、柔しく拒む。マルセリンにはフィデリオと云ふ胸中の人がある。フィデリオはマルセリンの父看守長ロッコの配下に働らく事

にあつた者であるが、實はフロレスタンの妻あるレオノレーで、夫を救はんが爲めフィデリオある偽名の下に男装して居る。其中にヤクイノーは用事に呼ばれて立ち去り、再び看守長ロッコと共に出て來る。處へレオノレーも顔を出して「御命令の用事は済ましまして御座います」と告げる。

レオノレーが斯かる場處に身を投して居るのは、腹に一物有る故であるから、能く蔭日向く最も忠實に働らく。夫れが爲め、今ではロッコが囚人等を取扱ふ際あごには之を手傳ふ迄の信用を得て居る。其上凡てに就て、至つて親切で、マルセリンにも柔しく振舞ふ故、ロッコは愈々此レオノレーが氣に入り、應ては娘の婿にと、其の心組を物語るのので、レオノレーは心中大に驚いて居る。

此監獄署の典獄ピザローは、私念の上から無辜のフロレスタンを捕へて、牢獄に投じ一日も速く之を亡き者と爲さんと、ロッコに彼れを暗殺せよと命する。併し罪なき事

世界のオペラ　　フィデリオ

を承知で之を殺す事は正直なロッコの如何にも断行し難い事なので、此命令を拒む。於て是ピサローは自分が下手人に成るより外に途が無い事とある。其處でロッコに對して、然らばフロレスタンの生命は俺自身が處分する故、其跡仕末に死骸を片附けるに就ては、之を埋ける穴を掘れと、命するので、今度はロッコも否み兼ねて承諾する。此二人の會話を立聞きして居たレオノレーは、良人のフロレスタンに關する事でもあきやとも思ひて憂慮に打沈む、折柄廣場に出された囚人等の中に若しや良人の御在はせずやと、細心に檢べて見るが、分明らずに了ふ。因に此囚人等が廣場に出されると云ふ事は、以前は許され無かつたのを、レオノレーの切ある申請に依つて、看守長ロッコが是を認容したのである。

第二幕

光線の透入も覺束あきフロレスタンの監房である。

冷たき床の夢にも上るのは、愛しの妻のレオノレーが事である。強き想念は歌とあつて現はれる。「我が生活の春の日の唯一つある慰安と方は戀の煙かあ。あ！我が胸に燃ゆる火は君が方へと靡けども、悲しからずや囚はれの寒き牢屋のこの惱ましさ」かく獨り慰さめては居たものゝ、結ばれたる思ひに堪へ兼ねて、其儘寢臺の上に打ち仆れる。此處へ入つて來るのはロッコとレオノレーである。

ロッコは此幸薄きフロレスタンの身の上を思ひ遣り乍ら、震ふ手足に力を込めて黙つて墓穴を掘り始める。

此處に悲痛の極みある墓堀の曲が奏せられる。レオノレーは薄暗き室内を我が夫は何處にと透し乍ら、今打倒れたフロレスタンの顔を見詰て居る。

フロレスタンの眼覺めたのに、看守長はコップに一杯の水を與へる、フロレスタンは

此賜物に打喜んで禮を述べ、レオノレーは餘りに窶れた面貌に夫れと見定めが付か
あかつたが、聲計りは變らぬ良人。その聲を耳にしては、さては良人！と打ち歡び、
面には夫れとは表はさねど、看守長に打ち向ひ、此哀れか囚人に一片でも、良い麵麩
を恵んでやつては如何と云ふ。看守長も心に掛けて居る此囚人、況んや頼み手がレオ
ノレーの事、早速承知を爲る。かゝる處へ典獄のピサローが入つて来て、フロレス
タンを見るや、矢庭に之を刺そうとする。レオノレーはピサローの姿を見るや、良人の
危急を知つて驚ろき、其場に跳り出て、二人の間に飛んで入る。ピサローは怒つて此
邪魔者奴と、レオノレーを投げ付ける。此方はレオノレー、直ちに起直つて、常に肌身
離さず持つて居る短銃を狙ひ持ち、フロレスタンを身を以て庇ひ乍ら「フロレスタン
の命を召されるならば、先づ其前に私から」と呼ぶ。ピサローは氣を苛ち、二人を
共に刺さんとする。二人の命は正に風前の燈火である。此時遅し、遙かに響く嗽吠の

音、門衛のヤクイノーは慌しく驅け付け來つて「只今國務大臣の御出で」との注進に
ピサローも餘儀なく劍を收め、兩人は辛くも救はれる。

茲に「あゝ我が心の言ひ得ぬ歡喜」と云ふ二部合唱がある。

舞臺一轉王城の前ある鐘頭堡の場と成る。

國務大臣ドン、フェルナンドは國王の命に依り囚人に特赦を行ふのである。此中に
フロレスタンの名前も在る。フロレスタンとフェルナンドとは友人の間であるが、死
んだと計り思つて居た友の命の在つた事を知つて、フェルナンドの喜びは非常である。
茲に哀れあるはマルセリンで、今迄戀ひ慕つて居た青年のフィデリオは、自分と同性
の人妻であつたと知り、其の人格の高きは敬重すれど、失はれた戀の憂悶は限りが
無い。最後にピサローの悪心見破られ、フロレスタンとレオノレーは愛の常蔭に樂し
みの泉を汲み盡す事にある。

第七

オルフオイス

グルック作曲

ORPHEUS.....GLUCK

歌詞はカルサビギー Calabrieri の手に成り、以前はコンセルトのオペラであつたのを改作して、全然演劇的にしたものである。元來は伊太利式に作曲されたが、後ち一千七百七十四年より歌劇の爲に佛蘭西式に改めたのである。それ故此オルフオイスは 伊太利原曲のもの、佛蘭西原曲のものは區別しなければならぬ。

初演 一千七百二十二年十月二日維也納

登場人物

- オルフオイス Orpheus (オイリディケの良人) [女 低]
- オイリディケ Eurydice (オルフオイスの妻) [女 高]
- アモール Amor [女 高]

其他 コーラス

注意 此歌劇に於けるオルフオイス役には當初男聲高音部を使用したに、其後其聲調の余りに高音男聲には不適ちりと認め、自來女聲低音部歌唱家を以て當らしむる事としたのである。歌劇にして女性が男性に扮するには稀有の事あるが、此オルフオイスは除外例である。

第一幕

愛する妻を亡たオルフオイスは、孤影悄然として亡きオイリディケの墓畔に佇み、綿々の情を訴へつゝ。美はしのオイリディケを再び地上に還し給はれと祈る。と、忽然現はれたのはアモールの神である。此の愛の神は愁歎に沈むオルフオイスに誠めて告ぐ。

「愛憐の情に厚きツオイス大神は、汝の切なる願望を許されて、オイリディケを常闇の國から此地上に伴ひ歸れと仰せられる。されどオルフオイスよ、汝の妻に一瞥たりとも與へてはあらぬ。如何に汝の心は妻を慕ふとも、ゆめ汝の眼を開くあよ。万一此禁戒を破るならば、オイリディケは再び汝の手に抱く事は出来ぬ事にあるぞよ」と。

第二幕

暗黒ある常闇の場である。常闇の國は死者の國あれば、すべて「影」といふものが無い。生けるオルフオイスは自分の「影」に災されて、其儘ではかの國に赴く事が出来ぬ。漸くにしてオルフオイスは「影」に説いて、己が身から去らしめる、かくてオルフオイスは歡喜を胸に満たして懐かしの妻を迎へんと、常闇の國へと旅路に上る。オルフオイスは其の母ミューズの神より與へられし手琴(ラール)を手にして、馴れぬ旅路を

通りくこゝに地獄の幽界に來着する。

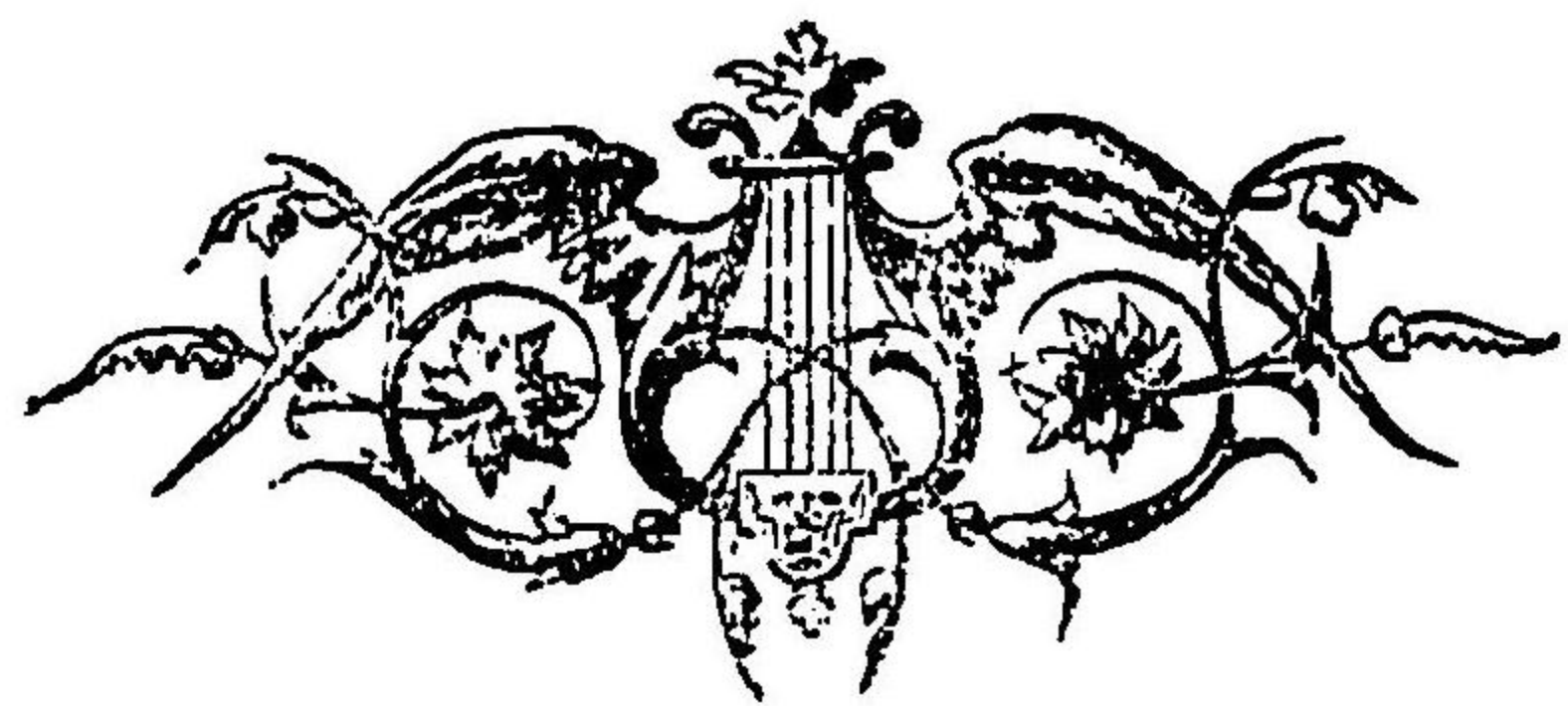
魔鬼等はオルフオイスの願ひを聴かず、幽門に進むを許さぬ。されどオルフオイスの聲調の妙あるは、一度之をきくもの魂を天外に飛ばし、心あき石にも情を知らしむる程あれば、悪鬼等もオルフオイスの切なる願ひを唱詠するの妙音に心和らぎ、遂に幽界の門を開きて入れしむ。常闇の國に住む善の亡靈はオルフオイスの姿を見て敬意を以て迎へ、やがてオイリディケを其前に伴つて來る。併し神命に忠實なオルフオイスは心の中には惱みながらも、敢て妻を顧みる事をしあい。黙したるまゝ、兩人は地上へと歸つて來る。

第三幕

兩人は密樹葱々たる森林に差し掛かる。オイリディケは先程から夫の姿に「影」無きを

訝り、尙自分に一瞥をも與へぬ心を測り兼ね、夫の愛の變つたのではあいかと、疑つて、遂に堪へ兼ねて、オルフオイスに己を顧みん事を願ふ。オルフオイスの苦惱に較べれば、オイリディケのそれは數でも無い。オルフオイスは飽までアモールの言葉に従ふて居る。オイリディケの疑念は其極に達する。此上は再び常闇の國へ歸るより詮術もあしと、訣別の意を述べる。如何に自製の念強きオルフオイスも、今は凡てを忘れ胸の中には、只オイリディケを見んとの想念が燃わに燃わゆる計り。あはれや愛しのオイリディケは夫の一瞥を受けた刹那、綠草の上に打仆れる。此瞬間の出來事に、オルフオイスの念頭を閃めき過ぎたのは自盡と云ふ事である。懷中より抜かれた短劍は將に其の主の命を絶たうとして居る。此時遅し、何處からともあく顯はれた愛の神アモール。オルフオイスの純潔、熱烈ある愛情に感じ、遂に兩人をば光明の世界に立歸らしめる。

アモールに救はれた相戀の兩人は歡喜の情極まつて激しき抱擁の中に我を忘れる。



第八

アウリスのイフィゲニー

グルック作曲

IPHIGENIE IN AULIS.....GLUCK

此は三幕物で、シベリマン、Schumann に依つて「永久に磨る無き歌劇」のまで賞賛されて居る名作である。

初演 一千八百七十四年四月十九日巴里

登場人物

アガメムノン Agamemnon (イフィゲニーの父)

〔男中〕

クリテムネストラー Klytemnestra (イフィゲニーの母)

〔女中〕

イフィゲニー Iphigenie (アヒレスの妻)

〔女高〕

アヒレス Achilles (イフィゲニーの良人)

〔男高〕

ペトロクルス Petrokus

〔男低〕

大僧正カルカス Kalchas

〔男低〕

護衛兵長アルカス Arkas

〔男高〕

女神ダイアナ Diana

〔女高〕

第一幕

トロヤ遠征の希臘の陣營は肅として嚴そかに立ち連あつて居る。大將アガメムノンは女神ダイアナの命に依つてその愛娘イフィゲニーを此度の遠征軍の幸福の爲に犠牲として神前に供せねばならぬのである。如何に勇猛かアガメムノンもみすみす獨り娘を犠牲にするは國家の爲とは云へ、忍び得ぬ處である。されば護衛兵長アルカスをミケーネに遣はして、妻のクリテムネストラーがイフィゲニーを連れて此のアウリスに來ぬ様

世界のオペラ アウリスのイフィゲニー

にと傳へさせる。然るにアルカスの出發に先じて、イフィゲニーは其の母に伴はれてアウリスの此陣營に到着する。希臘人等は大将の陣營に集まり來つて、イフィゲニーの到着を滿腔の感謝と熱烈ある同情を以て歓迎する。イフィゲニーの婚約者アヒレスも人々に後れて此處へ來る。

折柄大僧正カルカス此場に臨んで、此遠征をして至き成功を收めしめんが爲には、女神ダイアナに犠牲を捧げなければならぬと告示する。併しイフィゲニーの名は擧げられぬのである、けれどアガメムノンは此れを聞いて、今更の如くに煩悶して夫は自然と態度に現はれる。

第二幕

征途に上る前にとてアヒレスとイフィゲニーの結婚式は愈々舉行さるゝのである。此

場はアガメムノンの邸で、今や數十の處女達はイフィゲニーに結婚の賀詞を述べに來て居る。然るにイフィゲニーは此の歡喜と祝賀との渦巻の中に在つて、獨り故知らぬ不安に襲はれて瞑想に陥る。何者か偉大ある力が在つて己のが前途に凡てを逃さじと待ち構へて居るが如くに感ずる。人々の慰藉の言葉も何等の感應を表はさず、イフィゲニーの心は益々暗い方へと計かり向ふ。

やがて犠牲を女神に捧ぐるの時が來る。

護衛長アルカスは此旨をイフィゲニーに告げる。此れを傳へ聞いた母のクリテムネストラーの怒りは又一層である。自らの娘を平然として犠牲に差出さんとするアガメムノンは何と無情か父であらう。かくても此世に於て人の娘の親と云へるか。あゝかばかり殘忍非道ある父が又と此の日と星の下ある世界に在るであらうかと、良人を怨み、罵り、呪ふのである。かゝる處へ入り來るアヒレス、母の歎きを見て争で黙つて居や

う、事の由を聞くや否や、アガ멤ノンに逢つて如何にもしてイフィゲニーを救ひ度しと云ふ。アガ멤ノン元より木石では無い、さればアルカスを嘗てミケーネに遣はさんとしたのであるが、事遂に此に至り人民等の動亂を恐れ且將軍職の手前にも恥づれば、敢て自ら救ふ事が出来なかつたのである。

茲にアヒレスの言葉を聞いては直ちにアルカスを召して、クリテムネストラーとイフィゲニーをミケーの地に送り返へせと命令する。

第三幕

護衛長アルカスは大將の命に依りイフィゲニーを救ひ、彼女を通れしめんとて其の天幕に来る。犠牲を求める希臘人の狂ひ叫ぶ聲は天幕を繞つて、凄愴の氣を漲らしめるアルカスが此の騷擾を制せんと天幕を出づる時、恰もアヒレスが來り會し、茲に兩

人は力を協せて、狂氣の如く叫喚する群集を鎮めイフィゲニーを伴ひ去らんとする。然るに此時イフィゲニーはアヒレスを拒み、凜然として祖國の爲め自ら進んで犠牲たらんとの意氣を表はす。於此アヒレスはかの大僧正カルカスこそ、わが妻の命を絶たんとする者あれとて、大僧正と、その神殿と共に屠り倒さすば己まじと叫びて去る。アヒレスが立ち出づるや、群衆は再び烈しく叫喚して犠牲を求める。此時クリテムネストラーは半狂亂の姿で、此場に走り出でるが、心激した余り氣絶して其場に打倒れる。下僕等は驚ろき走せ寄つて介抱に努める。

此時イフィゲニーの艶麗な姿は俄に崇嚴を加へて、天女の如く神々しく、天幕からいで來るのである。四圍に集り群れる人民は此の美しい犠牲の姿を見るや天も動け地も裂けよと歡呼の聲を揚げる。母クリテムネストラーの呼吸は漸やく平調に復して來たが、周邊の様子に忿怒は其極に達し、それが

「ツオイスの神よ、汝の電光を投射せよ」

の有名な獨唱とあつて現はれる。

此時舞臺は轉じて海邊あるタイアナの神殿の前の場とある。群集する人民は犠牲よくと喚叫する。アヒレスは飽迄も其妻を救はんとして悶く。

かゝる處に威嚴と温情との權化ある女神タイアナの聲あつて、イフィゲニーが敬神報國の眞情、神々の御心に通じ、希臘人はそれが爲め犠牲を捧ぐるに及ばざる旨御告がある。此にアヒレスの願望も容れられ、戀人兩人は再び平靜の愉樂を許されるのである。

Luigi Cherubini.

ルイザイ、ケルビニイ

一千七百六十年九月十四日フローレンツ出生

一千八百四十二年三月十五日巴里にて死去



一千八百四十二年三月十五日巴黎シムズ券法
一千八百六十年九月十四日ノローマシムズ券法

シムズ券ノシムズ券

Luigi Cherubini

第九

擔水夫

ケルビニイ作曲

DER WASSERTRAEGER.....CHERUBINI

此作は三幕物にして、作歌はブネリ(Bonini)の手に成り作歌作曲とも相共に成功したるものであるが、音ふ迄もなく歌劇の價值光彩は作歌よりも作曲の方に在るので、序幕のヒナレー曲の如きは嘆美すべきものである。

初演 一千八百一年巴里

場所 巴里

登場人物

アルマン伯爵 Graf Armand (國會議長)

〔男 高〕

世界のオペラ 擔水夫

世界のオペラ 擔水夫

コンスタンツェ Konstanze (伯夫人)

〔女 高〕

擔水夫ミヒヘリ Micheli

〔男 低〕

サボヤール Savoyard (ミヒヘリの息)

〔男 高〕

アントン Anton (ミヒヘリの息)

〔男 高〕

マルセリネ Marseline (ミヒヘリの娘)

〔女 高〕

タニエル Daniel (ミヒヘリーの父)

〔男 低〕

ロセッテー Rosette (農夫の娘)

〔女 高〕

其他大尉中尉軍曹等

第一幕

ミヒヘリの家で、家族は今團欒して面白相に物語りを爲て居る。ミヒヘリーの悴の了

ントンは自分が幼い時、飢に悩んで將に餓死せんとする處を、或る佛蘭西人の手に救はれたと言つて、さも感慨に堪へぬものゝ様である、それから父は、大僧正マザリンが國會議長アルマン伯爵を殺さんと、伯爵の首級に賞を懸けて居るが、伯爵こそ實に御氣の毒な御方である、是非之は救ひ度いといふ意を唱ふ。於是アルマン伯爵と、夫人コンスタンツェはミヒヘリーの家に匿れる事とあるが。偶々悴のアントンは此伯爵ころ我が命の恩人たる佛蘭西人あるを發見するので、此恩義を思ふに付けても、我家に伯爵夫人をば隠し、ミヒヘリーの娘マルセリネの所持せる旅行券を利用してアントン自身案内して安全の地に逃がさうとする。又一方父のミヒヘリーは伯爵をも他の地に移して御救致し度いと其手段に心を痛める。

第二幕

世界のオペラ 擔水夫

朝の空氣の爽快の中に、市街の出口の衛門は巍然として立つて居る、此の門の前の廣場へ来るのはアントンと伯爵夫人である。番兵は兩人の姿を見るや、引捕へて訊問する。幸ひにマルセリネに扮して居る伯爵夫人は旅行券を持つて居るので、無事通行を許されるが、アントンは旅行券が無いので門を出る事が出来ぬ。

伯爵は夫人の様に斯く容易に此門を抜け出る事は出来ぬ。折柄ミヒヘリは水樋を積んだ小車を曳いて来るが、之も呼び留められる。其處で機轉を利かして「御承知の事ではありませうが、國會議長アルマン伯爵の首級には澤山懸賞金が附て居ますが、一儲けしては如何です、して伯爵が彼方へ逃げるのを、今私は見えて来た處です」と番兵を煽ぎ立てるので、番兵は忿心を起し其れは旨い事を教へて呉れたと大喜び、早速番小屋に這入つて伯爵逮捕の準備を爲る。此隙にミヒヘリは伯爵を水樋の中から出して、衛門を通過せしめる。

第三幕

此處は巴里近在のゴネス村である。此處の農家の娘ロセッテが遠からず擔水夫の悴のアントンと婚禮の式を擧げると云ふので、ロセッテの朋輩は打連れて祝ひ物を持つて新婦の家へ行く。

此長閑な平和な村に一騒動持ち上がる。と云ふのは外でも無い。アルマン伯爵が此村へ落延びた形跡があると云ふので、兵士等が繰り込むのである。折柄農婦の姿に身を窺した伯爵夫人が、手に籠を提げて出て来る。之は伯爵が老樹の空洞に隠れて居るので、其處へ食物を運ぶ處なのである。二人の兵士は夫人の鄙には見られぬ優艶な姿に煩惱を起し、鐵面皮を戯れを爲る。夫人の来るのを待つて居る伯爵は空洞から此方を見ると此始末に、怒氣心頭に發し、前後を忘れて兵士を眼懸けて短銃を放つ。

世界のオペラ 繪水夫

此の我を忘れた行爲に因つて、伯爵は兵士共に捕縛されて了ふ。之を見て夫人は驚愕の餘り氣絶して、其場に卒倒するが、兵士等の介抱に漸く蘇生するや、我れにも非ず、伯爵の名を呼ぶ。茲に兵士共は今捕へた男が懸賞付きの伯爵であるのを知つて大恐悦處へミヒペリーが馳け付けて國王よりの伯爵を捕へる事を禁ずると云ふ命令書を示す。ミヒペリーの努力の効空しからずして、伯爵は危うき命を取止める。最後に伯爵の自由を得ると云ふ喜ばしきコーラスで此劇は終るのである。



Gioachino Rossini.

ジオバチノ・ロシニイ

一千七百九十二年二月二十九日伊太利ベザロ出生

一千八百六十八年十一月十三日巴里附近パシイにて死去



Gioacchino

一千八百六十八年十一月十三日巴黎國家歌劇院演出
一千八百六十二年二月二十日巴黎國家歌劇院演出

Gioacchino Rossini

Gioacchino Rossini

第十



シビラの理髮師

ロシニイ作曲

BARBIERE DI SIVIGLIA.....ROSSINI

此作は二幕の喜歌劇でモツァルト作の「フィガロの結婚」と共に世界有数のオペラである。ロシニイの作曲せるもの中、ウイヘルム、テルの如きもまた著名な歌劇で、ロシニイの歌劇は其の數三十有七、シビラの理髮師及テルの如きは白眉である。

初演 一千八百十七年一月二十日羅馬

時代 十七世の中葉

場所 シビラ

登場人物

世界のオペラ シビラの理髮師

世界のオペラ ミニラの理髪師

アルマビバ伯爵 Armaviva

〔男 高〕

ドクトル、バルトロー Dr. Bartolo

〔男 低〕

ロシネー Rossine (バルトローの被後見人)

〔女 高〕

樂長バシリオ Basilio

〔男 低〕

マルセリネ Marceline (バルトローの召使)

〔女 高〕

理髪師フヒガロ Figaro

〔男 中〕

フィオリロ Fiorillo (伯爵の小使)

〔男 高〕

ロシネーは妖艶花を欺く計りの美人である。さればロシネーに思を焦して居る者は數知れぬ、其中でも殊に熱烈なのが二人。一人はロシネーの後見人の禿頭翁バルトローで、他の一人はアルマビバ伯爵である。

バルトローは伯爵の此野心を能く承知して居るから、自分は負けては成らぬと、理髪師のフヒガロを味方に引き入れ、種々手を盡して謀策を立て、居る。伯爵は何とかしてロシネーに近附かうと、或時は兵士の姿に變じてロシネーの宅に宿泊を求め、之は失敗する。次にはロシネーに「私は樂長バシリオの弟子でバシリオは目下病氣の爲め稽古が出来ぬ故、私が代稽古を致しても宜い」との旨を書き送り、ロシネーと親しく物語らんと企てる。此度は計畫圖に當り、本望を遂げて手を握り合ふ、處が夫れをバルトローが見付けるが、理髪師フヒガロは此兩人死ぬ程惚れ合つて居るのに同情して、兩人に味方し、巧みにバルトローを逐ひ出す。此間にフヒガロの種々滑稽な態度動作が續出する。バルトローの心中は甚だ平らかで無い。斯くては最後の手段に頼るより外に道無しと、早速樂長のバシリオを頼んで公証人の許へと走つて貰ふ。バルトローは伯爵とロシネーが手を執り合つて居る處を認めて氣が氣で無いので、早速

結婚契約書を作らうとする。程なく公証人は遣つて来る。併し伯爵とロシネーはバルトローが未だ來ぬのを幸此結婚契約書に署名を爲て了ひ、理髮師フヒガロの指揮で巧く此場を逃げ出す。直ぐ後へバルトロー、禿頭から湯氣を立て乍ら這入つて來るが、契約書には誰も頼まぬのにアルマビバ伯とロシネーとの名がちやんと書いて在るので大に驚ろき滑稽を身振りに其失望の程を現はすのである。



第十一

白衣の婦人

ボアルテュー作曲

DIE WEISSE DAME.....BOHEDEU

是はスクライプ(Scribe)作歌の三幕の喜歌劇である。此曲は地方の色彩を巧妙に表はし、又森林の民曲を手際よく應用してあるので、今日しなは盛んに演奏されて居る。

初演 一千八百二十五年十二月十日巴里

登場人物

ゲーヴストン Gaveston (アペネル伯家の家扶)

〔男 低〕

ア>NNナ Ana (ゲーヴストンの被後見人)

〔女 高〕

マルガレート Margarete (アペネル伯家の乳母)

〔女 低〕

世界のオペラ 白衣の婦人

ジョージ、フラオン George Brown (英吉利の士官)

〔男高〕

ディクソン Dickson (小作人)

〔男高〕

マクアートン MacInton (仲裁判事)

〔男低〕

第一幕

小作人ディクソンの家の前の廣場。

ディクソンの俸が今洗禮を受けやうと云ふ處なので、父親のディクソンや近隣に住まふ小作人仲間も此處に集つて居る。然るに肝腎の命名親の一人が突然参列が出来兼ねると云つて来るので、困り切つた一同の者は思案の躰である。處へ英吉利の士官ジョージ、フラオンが来て一夜の宿を乞ふ。皆の者は喜んで此士官を泊める事にして、其代り命名親の一人に成つて貰ふ。

於是ディクソンの妻のゼンニーは鄙の事として取立てゝの款待も出来ぬが、心盡しの癡癡に士官も喜ぶ。其中に士官はゼンニーが、アペネル伯の古城には怪しい幽霊が出るかと云ふ。「白衣の婦人」の歌を唱ふのを聞かして何、そんな馬鹿氣な事！、幽霊などは此世には居らぬと云つて大笑すると、小作人のディクソンは眞面目腐つて「否、否、笑ひ事では無い、現在此の私が其幽霊を見、又言葉も交した。而して私がか此様に樂に暮して居られるも、其の幽霊の御蔭なのである。併し其の幽霊と約束を致した故、何日、何時でも呼ばれて何んか事でも幽霊の命に應せねばならぬ」と物語ると、妻のゼンニーは此様を事聞くのは初めてなので吃驚する。此時ディクソンは戸外に出るが間もなく戻つて来て、あの白衣の婦人が、今晚丑満時に城に來いと云つて手紙を寄越したが、どうも困つた事に成つたものだ、と深い憂の色を現はす。是を見てフラオンは氣の毒にも思ひ且つは性來の冒險心が頭を掻き「それならば心配する

あ、俺が代りに行つて遣る」と約束を爲る。

第二幕

アペネル伯爵の邸内 大廣間である。

伯爵の昔の乳母マルガレートが「糸紡ぎの歌」を唱つて居る處へ、伯爵家の家扶ゲーファストンと、其の被後見人アンナが出て来る。ゲーファストンがアンナに「故伯爵夫人が御逝去にある時、お前に何か御遺言で御頼みがあつた相だが、一轉何んか事か聞かせて呉れまいか」と云つて居ると、其處へ一面識も無い男が案内を乞ふ。之はアラオンなのであるが、アンナとマルガレートは自分達が招いた農夫のディクソンだと思ひ切つて居る爲め、直に室内に入れんとする。ゲーファストンは之に反對して、若しアンナが胸の秘密を自分の前に打明けるならば入れて遣るが、であければ飽くまで反

對する、だが遂に這入つて来た男を見ればディクソンでは無い。兩人の女は如何した事かと驚ろきはするが、マルガレートは虫の知らせか、此男は故伯爵の親戚にでも當りはせぬかと思ふのである。此兩人の女が此席から去ると、アラオンはゲーファストンに向つて自分が此處へ来る様に成つた事情を、一々物語る、然るにゲーファストンは冷淡に構へ込んで、然様か馬鹿氣な事が有るか、其の白衣の幽霊に是非遇ひ度いとの仰せあら、別段抗議を申込まぬ御勝手にあさいと擲擲ひ乍ら、アラオンを獨り其場に殘して立去つて了ふ。性來剛膽なアラオンは此様處でも平氣な者で、頓てウトウトと微睡む。と其處へ忍びやかに這入つて来るのは白衣を身に纏つたアンナ婦人である。其婦人は聲も低く「貴方は曾て某處の戦鬪に参加して重傷を受けた事が御有りませう。其時非常に心を盡して介抱を爲た一人の女が在つたのを御記憶ではありませんか」と問ふ。成程然んか事が有つたとアラオンが返事を爲る。それから其婦人は猶聲をひそ

めて何事かをフラオンに物語りて姿は掻き消す如くに見わす成る。フラオンは無性に睡たく成つて、其儘寝入つて了ひ、前後も知らず、曉方にあつてゲーファストンに呼覚され、初めて昨夜の城中で寝て居た事を思ひ出して我に返る。

此日は恰度、此城を競買に附する日なのである。強慾のゲーファストンは是非自分の手に入れ度いと目論見を立て、居るのであるが、多くの小作人連中はゲーファストンの如き者に徒に此城を渡してあるものかと頻りに運動を爲て居る。ゲーファストンは何を小癩か農夫仲間がと、農夫達の金の調達を妨げて遣らうと企んで居る。併し農夫仲間は逆も金が出来相にも無いので、愈々此城もゲーファストンの手に入る事と諦めて了ふ。然るに何ぞ計らん、フラオンが横道から飛び出して巨額の金を提供し、ゲーファストンの向ふを張る。之は彼の昨夜逢ふた白衣婦人の命令に出づる事なのである。處が此の競買に就て列席して居る仲裁判事 マク、アートンがフラオンに向つて前以

て注意して置くが、萬一買方が嚴定の時間に金を支拂はあい様か事があると、禁錮の刑に處せられると云ふ事を承知して居れと脅かすが、此方はフラオン、白衣婦人の後援を持って居る故、委細承知と平氣で構へて答へる。

第三幕

此處は城内の一室で、壁間には城主代々の肖像が懸け連ねてある。此城の運命の様々を沈黙の雄辯を以て物語つて居る様に見える。

アンナは小鳥の如き快活な又楽しい心にあつて嬉し氣に出て来る。間もなくアンナが去つた跡へフラオンが現はれる。競買は終にフラオンに落札し此城は全く其の手に入る事と成つたのである。此處へ數多の人々が出て来て、今度は良い御城主か見えたど一同歓迎と祝賀の意を述べる。フラオンは新らしく自分の所有と成つた室内を彼方

此方と見廻して居ると、不圖、自分が曾て幼い時に見たと云ふ、幽かき記憶に残つて居る畫が眼に止つて、理由も無き懐しさの念が込み上げて、恍然とあつて空想に陥るとも無しに、現實の世界の事は茫然と忘れ果て、さては古來人の口に慣れて居る蘇格蘭の民歌が思ひ出されて全く夢幻の境に迷つて了ふのである。折柄此處へ出て来るのはゲーファストンと仲裁判事で、支拂ふべき金額を早速此處で渡す様にと云ふのを、アラオンは其後肝腎の例の白衣婦人に逢はぬのであるから、頗る都合が悪い、今少し待つては呉れまいか、と願ふ様に云ふが、兩人は嚴然として不許可の旨を云ひ渡す。時しも忽然として白衣の婦人が現はれてアラオンに對し「貴郎は以後アベル故伯爵家の相続人と成つて宜しい」と云ひ乍ら、故伯爵夫人から委託を受けて居る夥多の財貨を渡す。

此の白衣婦人は怪しの者でも何でも無く、實はアンナで、是等の事は凡て伯爵夫人の遺言に依つてアンナが取計らつた事なのである。其内にアンナは曾てアラオンが負傷の際、懇あ介抱を爲た當時の女であると云ふ事が明白とあり、茲にアラオンとアンナとは是が縁と成つて芽出度く華燭の典を舉行するのである。



世界のオペラ 巴里のヨハン

第十二

巴里のヨハン

ボアルドュー作曲

JOHANN VON PARIS.....BOELDIEU

此れは二幕物の喜劇劇で、シムナーマン Schumann は此劇を評して、傑出せる歌劇にして、吹奏樂器中特にクラリオネット及ホルンは最も巧みに應用せられ、而も聲樂を奪も害する事無く調和甚だ佳しと言つて居る。

初演 一千八百一十二年四月四日巴里

場處 ビレーネンの一旅舎

時代 十七世紀

登場人物

ナバラの姫 Prinzessin von Navarra

〔女 高〕

宮内大臣

〔男 中〕

巴里のヨハン Johann

〔男 高〕

オリビール Olivier

〔女 高〕

ペドリゴ Pedrigo (宿屋の主人)

〔男 低〕

ロレッツァー Lorezza (ペドリゴの娘)

〔女 中〕

第一幕

(103)

宿屋の主人ペドリゴは店舗の前に出て早く好い客が来ればと待つて居る。實はナバラの姫君が此家に宿られると云ふので、其れを心待ちにして居るのである。處へオリビールといふ男が来て主人に告げるには「今日巴里の貴族でヨハンといふ御方が御見えに依つて、御前の家で一番立派な部屋を明けて置く様に」との事である。

世界のオペラ 巴里のヨハン

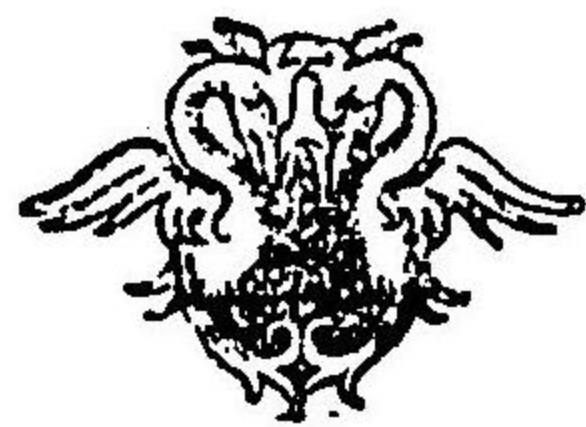
(102)

併し主人はナバラの姫君に先約が有るからと言つて之を断る。と其處へ此主人の娘口
レツツアーが顔を出してあの巴里のヨハン様あらば有名を豪い御方、是非御泊め申
し上げると可いと云ふ。けれど頑固な主人は更に聴き入れ無い。其中にヨハンが大勢
の供人を引連れて堂々と家の中に入つて仕舞ふ。と其處へ出て来るのは宮家の別當で、
巴里のヨハンと云ふ者は此家から追ひ出して貰ひたいと云ふと、ヨハンの方では
負けて居ず、俺が先に來たのだ、後から來て先客に無禮を爲るゝ。文句が有るのから
自分から出て行くが好い、と争ふ。此の口論の中にナバラの姫君が御附の者に取巻か
れて到着する。姫はヨハンの風采を見て、是れは屹度何處かの領主の微行で、巴里の
ヨハンと云ふのは假の名であらうと思ふのである。

第二幕

場處は第一幕に同じ。オリビールとロレツツアーの二部合唱で始まる。

巴里のヨハンとナバラの姫君の優麗な姿に、全然心を打ち込んで、自分は某國の皇太
子であると物語る。姫は憎からず思つて居るヨハンの此の言葉を聞くや、自分の想像
の當れる不思議を喜び、茲に兩人は互の心を語り合ひ、楽しき夢に陥るのである。
最後に愉快な二部合奏があつて幕は閉ぢられる。



第十三

イエソンダ

スボール作曲

JESSONDA.....SPOHR

此歌劇はゲーヘ Gae の三幕物である。元來スボールの作曲は一般に單調なりこの評はあるが、此イエソンダには頗る優美な節奏が表はれて居る。

初演 一千八百二十三年七月二十三日獨逸カッセル

登場人物

- イエソンダ Jessonda (ラヤアの未亡人) [女高]
- アマチリ Amazili (イエソンダの妹) [女高]
- ダンダウ Dandau (婆羅門の僧正) [男低]

- トリスタン、ダクニヤ Tristan d'Acunha (ホルトガルの大將) [男中]
- ナドリ Nadori (婆羅門の信徒) [男高]
- ペドロ、ロベッツ Pedro Lopez (軍隊司令官) [男高]
- 印度の士官 [男中]

場所 印度マラバルの海岸

時 十六世紀

イエソンダは良人ラヤアが死んだので婆羅門教の慣例に従ひ殉死の爲に火灸りにされる事に成つて居る。婆羅門の信徒ナドリは此旨を未亡人イエソンダに告げんとて其の邸に到り、逢つて見れば未だうら若いイエソンダの、水も滴るばかりの姿に打驚き、斯く迄の美人を此儘に殺すと云ふ事の無残を切に感じ、如何にもして救はんと心を悩ます。其内にナドリはイエソンダの妹のアマチリの可憐な姿に思ひを焦し、一層イ

世界のオペラ イエソンダ

エソンダ救命の事を思つて已まあい。是れアマチリと共に成らんとする心あるが爲めである。ナドリは折柄葡萄牙の大將トリスタン、ダクニヤの事を思ひ出し此人に縋つて自分の計畫を果さんとする。

トリスタン、ダクニヤは曾て此土地に於て或る佳人の姿に思ひを惱まして居た事があつたが、夫が果敢あゝい水の泡の如く、只一時の夢に過ぎあかつたと云ふのは、一言の甘い陸言をも交さぬ中に、其の佳人の行衛を見失あつたのである。此將軍がナドリの物語を聞いて、早速同意して水火の勢をも辞せずと誓つたも道理、かの陽炎の如き胸の美人こそ實に此のイエソンダであつたからである。

將軍とナドリは百方手を盡して、様々計畫を立て、二回迄も失敗こそは爲たれども屈せず、遂に大願成就イエソンダを婆羅門の僧侶等の手より救ひ出すのである。

Daniel Francois Esprit Auber.

ダニエル、フランソア、エスピリ、オウベル

一千七百八十二年一月廿日カエン出生

一千八百七十一年五月十三日巴黎にて死去

第十四

壁工と錠前屋

オウベル作曲

MAURER UND SCHLOSSER.....AUBER

此三幕物の喜歌劇の作歌者はスクライブ(Scribe)と、オウベルは此曲を以て佛蘭西に於る喜歌劇作曲家中の傑人を迄に賞賛されたのである。

初演 一千八百二十五年五月三日巴里

登場人物

レオン、ド、メルビユー Leon de Merville (十官)

〔男 高〕

イルマー イーナ (希臘の女)

〔女 高〕

ロージェ Roger (壁工)

〔男 高〕

世界のオペラ

壁工と錠前屋

世界のオペラ 壁工と錠前屋

バプティス Baptist (錠前屋)

〔男低〕

ヘンリエット Henriette (バプティスの妹)

〔女高〕

ベルトラン夫人 Bertrand

〔女低〕

場所 序幕と三幕目は巴里の街端れのサンアントワン。二幕目は土耳其の

大使館

第一幕

町はづれの宿屋の前の廣場の光景。

ロージェとヘンリエットの結婚式がある。新郎のロージェは祝賀客に對して得意の歌を唱つて聴聞させて居る。その歌の終りに「たゞ勇氣のみ、常に弛まぬ勇氣こそ、誠上あき寶あれ、友の睦みの尊さをも此の寶にぞ宿るある」との句があるが是は此劇に於て

最後まで重要なる意義を含んで居る言葉なのである。村人等は此貧窮の壁工が何處から此んか婚禮の費用を持つて來たのであらうかと不思議がつて居る。中にも嫉妬燒で饒舌家のベルトラン夫人は「何うもあのロージェの結婚費用の出處が怪しい、屹度秘密を理由があるのだらう」と觸れ歩くのである。折柄不意にメルビユーと名乗る一士官が遣つて來て、ロージェと親しく言葉を交はすので、村人等は尙も不審と見て居るが、頓て此不審が霧れると同時に、前の結婚費の出處の疑問も解け、一同大喜びをする。と云ふのは曾てロージェが此士官の生命を救つた事があるが、是が縁由と成つて、士官は其謝恩の意で此度の費用を調達して與へたのである。此喜悅の最中に、奇怪な姿をした二人の異様を男が現はれ嫌がり拒むロージェと、錠前屋のバプティスとを、面袍を以て目隠しし、何處へとも無く拉れ去る。此異様の男達は土耳其大使の命を受けて斯かる行爲をするのである。

第二幕

土耳其大使の泊つて居る旅館の一室である。希臘女のイルマーは、其妍麗ある姿が仇と成り、土耳其大使アブルターの爲に暴力を以て此處に強迫的に拉れ來られたのであるが、戀人のレオンが今にも救ひに來て呉ればと、心の中に念じ乍ら此室を出る。

處へ前幕の異形を装ひをした男の一人のウスベックが、ロージェとバプティスを連れて來て、此處で面袍を除いて遣る。扱て此兩人に向つて其職業に相當した仕事を命ずる。即ちロージェには石、漆喰等を以て壁を塗らせ、バプティスには足枷を造らせる。兩人は已む無く仕事に取掛る。

折柄イルマーの戀人レオンが奴隷を連れて其の愛人を救ひ出さうと、此場へ出て來

るが、番人の爲に捕縛されて了ふ。で早速イルマーと共に此世乍らの地獄ある、四圍厚い壁に包まれた部屋の中に押籠められる事に成る。ロージェは今自分の造つた牢獄の中に投げ込まれる兩人の者の顔を見て驚く。それも其苦。一人は自分の結婚費を出して呉れた士官のレオン、ド、メルビーユなのである。ロージェは明からさまに言葉を交へる事も出来ぬので、暗にレオンの勇氣を鼓舞する心意で「たゞ勇氣のみ、常に弛まぬ勇氣こそ、誠、上無き寶あれ。友の睦みの尊とさも此の寶にぞ宿るある」と、例の歌を唱ふのである。

第三幕

新郎のヘンリエットは良人のロージェとバプティスが異様の男に拉し去られた儘、何處へ行つたとも、如何に成つたとも判らぬので、五里霧中に彷徨する。心細さと、人懐し

さきに愛へ沈んだ客姿で現はれる。何事に就ても嫉妬と羨望の念を禁じ得ぬ彼のヘル
トラン夫人も此處へ出て来るが、一寸した事からヘンリエットと口論を始める。
此處に「喧嘩」の有名な二部合唱がある。

ヘルトラン夫人が拾台白を残して去つた跡、ロージエは考へ込んで歸つて来る。ロージエ
の心中は亂れに亂れて居るのである。悲喜交々至るとは此事であらう。自分は無事に
歸宅する事が出来、戀しい新妻の顔も見られるが、氣にあるのは恩人レオンの身の上
である。

あのレオンが幽閉せられた事、並びに自分が拉し去られた事、合点の行かぬ事計り
ある。是には屹度裏面に潜んだ罪惡が在るに相違あるまい、夫に付けても此儘にはす
て置きあいが、一体自分の拉し去られ、あの仕事をした場所が何處か分らぬので、
當惑して居る。妻のヘンリエットは良人の態度の餘りに餘所餘所しいので邪推を廻は

し「貴郎は如何したのです？ お隣りの人に伺へば貴郎は車に乗つて、土耳其の大使
の處へ御出でにあつた相ではありませんか」と云つて訊ねる。ロージエは目隠しをされ
て引張り廻はされたので、自分が何處を如何行つたのか判らずに居たが、妻の此の言葉
で、始めて自分の疑問も霽れ、さては恩人レオンの禁錮されたのは、其處であつたか
と、暗中に一道の光明を認め得た心地で喜び勇み、此顛末を妻にも語り、早速警察に
訴へて、恩人の災危を救はうと企てる。ロージエが奔走に出掛けた跡へ、バプティスも
戻つて来て、其處へ集まつて居る村人共に、今日は飛んでもない悲劇を見せられたと、
幽閉事件に就て見て来た有様を逐一物語るのので、一同は不幸な兩人に心からの同情を
寄せる。

折柄のロージエの聲に振向けば、曩の士官と今一人の美人を伴つて、欣然としてロージエ
が戻つて来たのである。レオンとイルマーはロージエに對して感謝と歡喜の念を致し、

世界のオペラ 壁工と錠前屋

村人等も一同ロージエの勇氣と義に厚きを讃稱するのである。



第十五

ポルティツイの女啞

オウベル作曲

DIE STUMME VON PORTICI.....AUBER

此の五幕の大歴史的歌劇はメクライフ (Scribe) の作歌である。シューマンが此劇を評した言葉の中に傑作なる作品と云つてある、が女主人公の無言動作を顯はす旋律の如きは如何にも精を極め妙を盡したものである。

初演 一千八百二十三年二月二十八日巴里

登場人物

マサニエロ Masaniello (漁夫)

〔男 高〕

フェネラ Fenella (マサニエロの妹にして啞女)

ピエトロー Pietro (漁夫)

〔男 低〕

世界のオペラ オルティツイの女啞

ボレラ Borella (漁夫)

〔男 高〕

モレノ Moreno (漁夫)

〔男 低〕

アルフォンス Alfons (ナポリの副知事の子)

〔男 高〕

エルビラ Elvira (アルフォンスの婚約女)

〔女 高〕

ロレンツォ Lorenzo (アルフォンスの下僕)

〔男 高〕

場所 ナポリとボルティツイ

時代 一千六百四十七年

第一幕

此場はナポリの副知事の邸の後庭であつて奥の方には瀟洒たる禮拜堂が在る。

副知事の息アルフォンス公は婚約者のエルビラと愈々華燭の典を擧げ大に祝賀すべき

此時に、胸中一塊の黒雲在つて、其爲め怏々として樂しまあひ。アルフォンスは曾て漁夫のマサニエロと云ふ者の妹に、啞ではあるがフェネラと呼ぶ可憐の少女が在つたのに戀をして、互に許す仲と迄で成つて居たが、其後エルビラとの關係が深く成るに従ひフェネラの方は自然と見捨てた姿とあつて了つたので今更の様に良心に咎められ其の苦痛に惱まされて居るのである。で、遂に堪へ兼ねて、自分の信任して居る下僕のロレンツォと云ふ者に此胸の悩みを隠す所無く打明けて了ふ。

此方はエルビラ、斯かる事の有るべしとは知らず、賀詞を述べ人々の華やか言葉の海の中に漂ひ乍ら喜色を満面に漲らして鳩の様を輝やかして居る。祝賀の大舞踏は始まる。啞のフェネラはエルビラの許に馳せ來つて「私は或る男に愛せられて居たが其男は心變りがして私を捨て、其上今では私を牢屋に入れて了つて自由を與へあひのです。今日は番人の眼を掠めて、やつと此處迄逃げて參つたので

世界のオペラ ボルティツイの女唄

すが何卒御助け下さる様に」とこの意を手振で通ずる。エルピラは屹度救つて遣るから安心して居れど約束する。

頓て式も済み、新郎新婦は打寛ろい居る處へフェネラが出て来る。エルピラは前に約束した故良人に頼んで此可憐な啞娘を自由を身にして遣らうとするが此時夢にも知らぬ秘せられたる罪惡が露はれて了ふ。フェネラの方でもアルフォンスを見て大に驚ろき周章て、其場を遁れ去る。

第二幕

波の音靜かに砂白く輝く海邊である。

麗らかな日影を浴びて漁師達は網を編んで居る。其中にフェネラの兄のマサニエロも

居て「見よ曙の光は遍ねし、あゝ美はしき其の輝きよ」と長閑な曲を歌つて居る。其内にピエトロと云ふ、是も漁夫の一人が、お前の妹は何處へ行つたものだから、心當りは残らず捜したが何うしても分らないと云ひ乍ら戻つて来る。マサニエロとピエトロは屹度悪者があつてあのフェネラを誘拐したのか、夫れども奪ひ去つたのに違ひあるまい、是非其奴を引捕へて酷い目に逢はせて遣らうと相談する。此所へ息せき切つてフェネラが驅けて来て兄に抱き付くのでマサニエロは驚ろき、在りし事情を問ひ質せば、呼吸をはずませ乍ら、フェネラは「私を瞞した豪い人は今他の女と婚禮をしたのだ」と手真似で物語る。併し敵手の者は豪い人とはかりで、更に姓名は不明なのである。此話を聞いた漁夫達の胸の血潮は躍つて、横暴ある所謂豪い人に手痛い復讐を試みようかと決心する。而して一揆を起さうと云ふ。マサニエロは然様な事は穩かで無いからと反對するが、多勢の者に説き伏せられて了ふ。其所で此の陰謀を人

に覺られまいとて何氣なき様を装ひ、口にはあの静かき「見よ曙の光は遍ねし、あま美はしき其の輝きよ」の歌を絶たぬ。

第三幕

ナボリの市場に、今、群衆は集まつて舞踏を見て居る。

士官のセルバーはアルフォンス公の命に依り、逃走して行術を暗ました啞娘を諸所方々と捜し求めて居るが、遂に此の群衆の中に其の姿を見出すので一手柄立てんとて是を捕へんとする。此様子を見て一同の群衆はセルバーに反抗し之が動機とあつて一揆が起る。

第四幕

漁夫マサニエロの住む小屋。

マサニエロは一揆を起した爲め、壓制は免かれたが、一面には人民の醜行悪事は募つて、漸く其弊に堪へず成りゆく淺ましさを歎じて居る。折柄此處へフェネラも来て、蒼然たる顔色に憂への意を現はし乍ら、一揆を起した者共の輕擧を憎む旨を手振りにて告げる。が、其場で疲勞の爲に睡りを催して寢入つて了ふ。マサニエロは妹の可憐な姿を眺めつゝ「眠り」と云ふ獨唱がある。

ビエトロは大勢の、仲間の漁夫共の先頭に立つて此處へ駆け込んで来て、我々の主張の一つは協つたが、肝腎の敵手のアルフォンス公は未だ平氣で威張つて居るのだから、如何してもあの分には爲て置けぬ、是非是から用意をして、ぶちのめして呉れるのは嫌だとは抗辯するものゝ、多勢に無勢で、終に漁夫仲間に引立てられて此場から去

る。

折柄訪ふ者があるので睡りに落ちて居たフェネラは我に還り、戸を開けば、這は如何其處に立つて居るのはアルフォンス公と夫人のエルピラで「此の窮境に陥つたのは元々私共の罪ではあるが、何卒哀れと思つて救つて貰へまいか」との言葉にフェネラは承知の旨を通じる。處へマサニエロが走せ戻つて「宜しう御座います、私は貴方の敵ではあるが是非御救助の事に盡力致しますから」と誓ふ。するところへ間もなく暴徒の群は大聲を揚げて一齊に押寄せ來り、アルフォンス公夫妻を害はんと有らん限りの亂暴を働く。此間に立つて暴徒を一身に引受けマサニエロは命懸けの奮闘に辛うじてアルフォンス公夫妻を危うさより免れさせる。

第五幕

ナポリの副知事の邸の大廣間、目も稜ある器具調度の絢爛又齊整、遙かの空を限つてヴェズビオ火山の噴烟は濛々と立騰る。

「見よ曙の光は遍ねし、あら美はしき其の輝きよ」と暴徒の先頭に高唱しつゝピエトロは、マサニエロも裏切りを爲た御蔭で毒を盛られやがつたと兼に語る處へ、一人の漁夫が、呼吸を切らして馳せ付け「一大事だ、今アルフォンス公が精銳の軍隊を引率して押寄せて來る處だ。否、否、一層恐しい事はあれ見ろ、ヴェズビオ火山が破裂したのだ。あの通り山の容が刻一刻に變つて行くではあいか」と彼方を指しつゝ告げる。

あの山の破裂は天の憤怒を意味するものと信じて居る漁夫一統の驚愕は一通りで無い、此上は自然の儘に成らんよりはと、仲間の中にも勝れて勇敢あるマサニエロを指揮者として戴き、アルフォンス公の精英に當らんものと、茲に一決成る。マサニエロは未だ

世界のオペラ オルティツイの女唄

毒殺されたのでは無く、恰も此處へ臨むので、ビエトロは百方説いて遂に劍を執つて陣頭に立つの已むを得ざるに至らしめる。

茲にアルフォンス公の軍兵と暴徒との大接戦の末、マサニエロは潔く勇敢なる戦死を遂げる。

フェネラは兄の無残の最期を見るや其場に氣を失つて打倒れる。一同の懇ある介抱で一度は蘇生するが、胸裡の苦惱は其極に達し遂に身を海中に投じて果敢なく死の故郷へと赴くのである。

第十六

黒装束

オウベル作曲
スクライフ作歌

DER SCHWARZE DOMINO.....AUBER

初演 一千八百三十七年巴里

登場人物

- エルフォルト卿 Lord Elfort (男中)
- ジュリアノ伯爵 Count Juliano (男高)
- メッサンナのホラチオ Horatio (男高)
- ギル・ペーレツ Gil Perez (王國婦人組合出納係) (男中)

世界のオペラ 黒装束

世界のオペラ 黒装束

アンゲラ Angela

〔女中〕

ブリッキタ Brigitta

〔女高〕

クラウディア Claudia (伯爵の家政婦)

〔女低〕

ウルスラ Ursula (王國婦人組合の女)

〔女高〕

場所 マドリッド

第一幕

舞踏室前の一室。

アンゲラに想を懸けて居るホラチオは、長椅子に靠れて睡りを装つて居るが、實は其アンゲラとブリッキタとの二人の合唱に耳を側て居るのである。合唱の中に「兩人で極く秘密にしたればこそ、此の假裝舞踏會に來られたのですね」と云ふ語がある。ホ

ラチオは頗ぶるアンゲラに戀する。その爲めホラチオは邪魔に爲るブリッキタを巧みに此場を去らせてアンゲラを口説く。アンゲラも憎からず思ふらしいが、ブリッキタと一緒に秘密であくば假裝舞踏會に來る事が出來ぬかの理由は更に不明である。ホラチオは出來る丈け長くアンゲラを引留め様とするが、アンゲラは「私が今日此處に永く居れば飛んでも無い不幸にある」とホラチオを振拂つて立ち去る。

第二幕

ジュリアノ 伯爵邸内、獨身者の食堂の場

アンゲラは舞踏會の夜、自分の家へ歸る途中で路を踏違へて了つて、遂に伯爵家に絶つて今宵一夜の宿を乞ふたのである。處が此伯爵家の家政婦クラウディアはアンゲラの話しを聽いて大變氣の毒がり、之を百姓女の姿に扮装させ、自分の姪であると假

世界のオペラ 黒装束

稱して、主人伯爵にも紹介する。伯爵も信任して居るクラウディアの姪と云ふので、殊の外喜ばれ、早速邸内で用事を手傳へと達せらる。

伯爵邸へ出入する紳士中、此の百姓女の様を装をして居る娘は、中々奇麗で而も温良に見えるると云ふので、心中秘に思ひを惱ます者もある。處がホラチオは、此見慣れぬ百姓女は確かに自分の戀する、アンゲラありと観破して了ふ。

さて會食が終つて、一同は食堂から出る。アンゲラも家政婦の部屋にと退く。

茲に王國婦人協會(此會は非常に嚴重な規則のある尼僧組合である)の出納係ギル、ペーレツは家政婦クラウディアに懸想をして居るので、微酔を帯びて其部屋を訪はんと靜かに扉を押すと、中から鳥の羽よりも黒い装束の者が跳り出る。ギル、ペーレツは吃驚仰天、是は是はと狼狽へる隙を見て、其怪物は「ギル、ペーレツ、お前は婦人協會の入口の鍵を所持して居るだらう。俺が要るのだから其れを此處へ出せ」と脅迫する。

出納係は憶病者、遂に鍵を渡すと、怪物は其れを奪ふ様にして引摺んだかと思ふ間に、早や其影は見えず成る。此黒装束の怪物と云ふのは實はアンゲラなのである。此處へ復たアンゲラを思つて胸を痛めて居る例のホラチオが、其の優姿を見やうとて現はれ、彼方此方と見廻はす。けれど何處にも影が無い。其處でクラウディアに尋ぬると、クラウディアは實は一向知らぬ女で、道に迷つて來た人だと云ふので、ホラチオは失望落膽する。

第三幕

王國婦人協會の應接間、瀟灑たる裝飾は看者の眼に清新ある諧調を覺えさせる。組合の制服を着たフリギッタが「何故まあ此の組合の規則には斯んかに馬鹿氣た事計り書いてあるのだらう」と愚痴を弄して居る。其處へアンゲラが出て來る。彼女は密

かに舞踏會へ行き、ホラチオに引留められた爲遅くあり協會の門限時間を過ぎた爲、歸る事は出来ず、例の伯爵邸に宿泊を求め、黒装束をして、此組合の出納係ギル、ペーレツを脅かして鍵を得たので、再び組合に戻れたのである。而して今ホラチオが戀しいと協言を云ふ。折柄協會所屬尼僧が現はれるのでアンゲラは去る。一寸去つて今度は協會の制服着用で現はれ、ギル、ペーレツが協會の規則に違反して一夜此協會を明けたる不都合をば、尼僧等が罵倒して居るのを聞いて、自分も一所にあつて不屈なる男よと云ふて居る、處へ一人の騎士が來て婦人協會の會頭に面會し度き旨を通ずる。尼は暫らく御待ちを云ひ捨て、彼方の禮拜堂へ夜の祈禱に赴く。これはホラチオである。彼は今度自分が無理な結婚を爲なければならぬ場合に立至つたので、其れを何とかして中止する許可をば、此處の協會の會頭に頼みに來たと云ふのである。ホラチオは室内に残つて待つて居ると、奥の方から美しい聲で、尼僧等

の神を讃頌する合唱が、恰度深山の静寂の中で聞く小鳥の歌の様に響いて來る、で恍然として其歌に聞き惚れて居ると、不圖、耳に刺衝を與へるものがある。夫は思ひ焦れて居るアンゲラの聲なので、ホラチオの動悸は思はず高まる。其處へアンゲラが徐ろに歩を運んで來るので、ホラチオは前後を忘れ、思ひの丈けを吐露して女に媚びる。男子禁制此協會、場所もあらうに此場で口説かれたアンゲラは驚き慌て、立ち去るが、改めてアンゲラが來て、女王殿下から御親翰あつて、私の退會を許されたこと、尼僧等に物語るのので、一同は打驚く。實はアンゲラは退會すれば、結婚が出来るからかのである。是を耳にして、ホラチオは我が宿願も目の當りに實現せられるので欣躍する。



第十七

フラ、ディアボロ オウベル作曲

FRA DIAVOLO.....AUBER

一名テラシナの宿屋 Gaschaus zu Terracina

此劇はスクライム(Scribe)の作歌に成る三幕物の喜歌劇で、作曲家オウベルの作中、最も歓迎されたもの一つである。

初演 一千八百五十年一月廿八日巴里

登場人物

フラ、ディアボロ Fra Diavolo (一名サン、マルコの侯爵) [男高]

カックバーン卿 Lord Cockburn (旅行中の英國人) [男中]

パメラ Pamela (カックバーン卿の夫人) [女中]

ロレンゾー Lorenzo (羅馬龍騎兵士官) [男高]

マッテオ Matteo (宿屋の主人) [男低]

ゼルリネ Zerline (マッテオの娘) [女高]

ジアコモ Giacomo (浪人) [男高]

ベッポー Beppo (浪人) [男高]

第一幕

テラシナの宿屋外縁の場。

羅馬の龍騎兵が集まつて、浪人者の強盗團を征伐するとして、それに就て語り合つてをる。常には快活な士官のロレンゾーは、如何したものか、今日は沈んだ顔をして居るので、兵士等は何れも不審の眉を擡めてをる。

ロレンゾーは此宿屋の主人の娘セルリネに戀して居るが、此女がフランチェスコと云ふ富豪の息子と、愈々明日結婚式を擧げる事にあつた爲め、貧乏士官の自分は逆も向ふを張つて夫を手に入れる事は出来ないと、失望の餘り何事も手に就かず、斯くは茫然としてをるのである。

折柄此の宿に泊つてをるカックバーン卿と其夫人バメーラが狼狽て出て来て、強盜の襲撃を受け所持品を一切掠奪されて了つたと物語る。之れを聞いた龍騎兵等、さてこそ例のフラ、ディアポロの仕事に違ひないと直様搜索に赴く。

兵士等の去つた跡で、カックバーン卿夫妻の二部合唱がある。其の内のカックバーン卿の歌に「戀し懐しの我が妻に、マルコの侯爵は横戀慕、思ふても憎い、人妻を覗ふ、かの侯爵よ」との意味の言葉がある。

此處へ、サン、マルコの侯爵が數多の家來を隨へて出て来る。是れ例のフラ、ディア

ポロである。カックバーン卿夫妻が去ると入違ひに、宿の娘セルリネが現はれ、フラ、ディアポロと題とする強盜流行を詠んだ、ロマンツの曲を節面白く唱つて聽かせる。フラ、ディアポロは頗る氣に入つた態で傾聴する。

折しもジャコモ、ベッポーと云ふ二人の悪浪人が忍んで来て、家内の様子を覗ふ。と其後から再びカックバーン卿夫妻が出場する。眼光の敏いフラ、ディアポロは、直ちに其衣類の中に貴重物を縫ひ付けてあるのを見透し、得意の秘法を以て夫れを抜き取らうと心に企む折柄、先刻の龍騎兵が戻つて来るので、フラ、ディアポロの目論見は阻止されて了ふ。

ロレンゾーを指揮官に戴いて、強盜を追跡した龍騎兵等は、首尾好くカックバーン夫人の奪はれた寶玉を取り返して来たので夫人の満足は一方あらず、指揮官であつたロレンゾーに一萬リーレの金子を謝儀として差出し、是非寸志を容れて呉れと乞ふ。

然るに潔白にして、金錢に冷かあるロレンゾーは、「私は單に職分として貴女の御被害を救つたまでの事で、決して其様を物を頂戴する理由はない。何卒夫れは御収めを願ひたい」と嚴然として云ひ張るので、夫人も士官の廉潔に感じ、強ひては勧めず其金子をセルリネに與へて了ふ。ロレンゾーとセルリネは此金だにあれば二人の望み通り借老を契る事は容易と、内心バメーラ夫人の深意を感謝する。

第二幕

宿屋の娘セルリネの寢室。

室内凡て整然として、左方はカックバーン夫妻の寢室に通じ、右方は薄暗い部屋に續いて居る。セルリネはカックバーン卿夫妻の寢室に燈火を点けて居ると、其跡へフラ、ディアポロは窃と忍んで来て、室内の勝手を窺ひ、強盜を働かんものと機を待つて居る。

フラ、ディアポロはセルリネの居るに氣付かずして、戸外に待てる部下に信號を與へると一團の盜賊は廊から室内に忍び入るが、セルリネの姿が見えたので忽ち慌として隣りの薄暗い部屋に潜り竄れる。斯かる事は露知らず、セルリネは獨り寐臺に上つて胸に戀人の像を描き乍ら、楽しい夢路を辿る。

盜賊共は、時分は宜しと、セルリネの寢て居る部屋を通り抜け、カックバーン卿の寢室に忍び込み、財寶を掠め去らうとする折柄、ロレンゾーが部下を引率して近寄つて來る足音が聞へる。油断はあらぬと、盜賊共は動搖し始める。奥の室に居るカックバーン卿は何處となく物騒がしいので出て見るが、戀の忍び男でも來たのだらうと想像する。士官のロレンゾーは恰度室に入らうとする途端あので、フラ、ディアポロははつと一時は思ふが、何處迄も空惚け侯爵と成り濟まし、極く低聲に

「實は英國の貴族がセルリネと逢引をするに云ふのを聞き込んだので、私も其を好

い機会と、其貴族の夫人に逢ふ處なのだ」

と臨機應變の言葉に、ロレンゾーの心を感はして其儘逃げ去つて了ふ。

第三幕

テラシナの山地の光景。

強盗團の首魁たるフラ、ディアボロは、山路を下つて来て、一片の命令書を傍の樹木の洞の中に隠す。此の命令の大意は百姓等が教會に禮拜に赴いたから、直ちに英國の貴族を襲撃せよと云ふのである。

此の日は恰も昇天祭に當る日なので村の百姓達は、年の祭日とて、何れも美々しく着飾り、三々伍々打連れ立ち、喜びの聲にさやめき乍ら出来る。フラ、ディアボロ配下のジアコモ、ベッポーの両悪浪人も變装して、此の村人の仲間の様を風をして来る。

今群衆が來ると見て、フラ、ディアボロは去つて了ふ。村人等は祈禱を終つて之れ亦一同還つて行く。

ジアコモとベッポーは老樹の空洞から件の命令書を探し出すが、字の解決が出来ないで當惑する。

此處へロレンゾーが遣つて来て我が戀人のセルリネは、外に男でも出來たのか、私に對して何處となく實を欠いて居る様に見えるが、如何したものだらうと繰言をして居る。其處へ以前の村人の群と共に、セルリネは酒を携へて出で來り、茲に昇天祭を祝ふ爲めに酒宴を開く。兩人の悪浪人は之に混つて大に酩酊した揚句、前夜セルリネが誰も聞くものあしと思つて唱つた歌を、忍び入りし際聞いて知つて居るので、思はず知らず唱ひ出す。

是れを聞いたセルリネは、此の男達が昨夜隣室に忍び入つた事を覺へ一同の者に此の

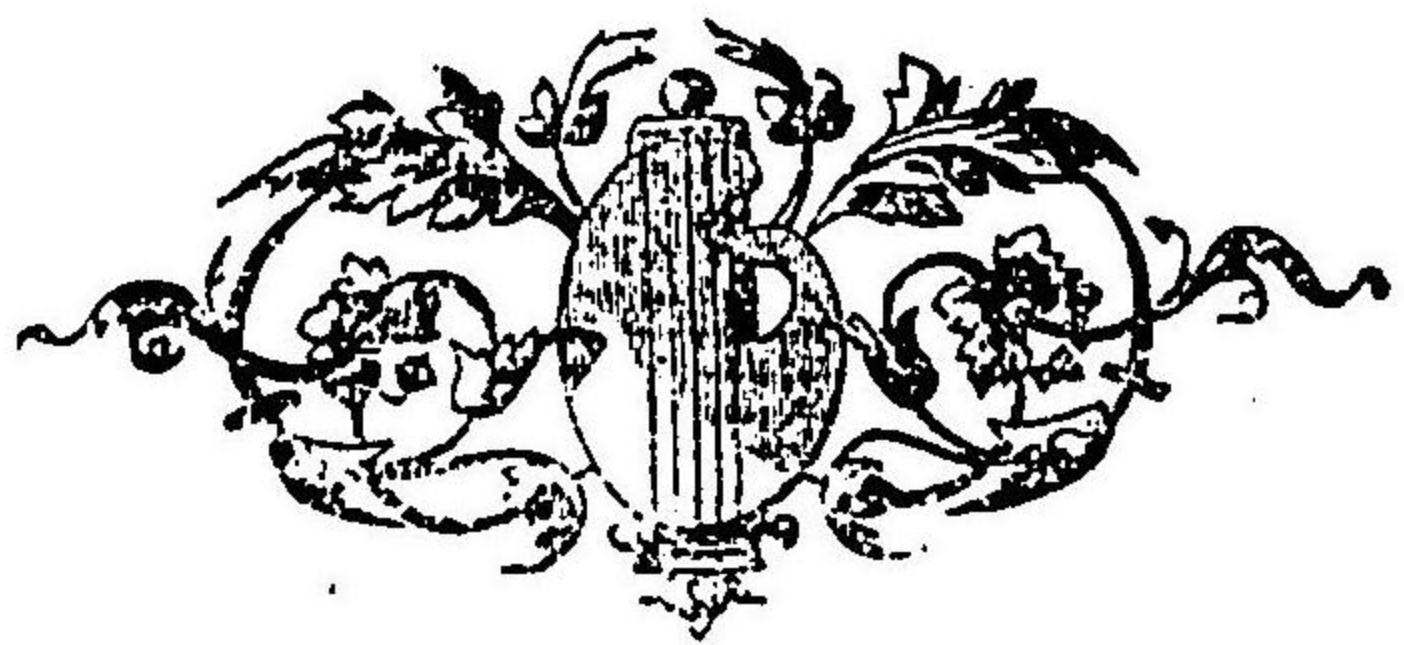
事を告げるので、直様兩人を取つて押へ、懐中を調べると、彼の怪しき書面が現はれる。其處でロレンゾーは部下に命じて、首魁のフラ、ディアボロを捕縛せんとする。

此方はフラ、ディアボロ、已は悪事の露見に及んだとは知らず、此時恰度彼方の岩上に顯はれるので、龍騎兵は驚ろいて酒の酔も醒め果てたベツポーに銃口を差し付け乍ら、「貴様の巨魁に此處へ下りて来いと云へ」と強いる。ベツポーも斯く成つては最早通れる路も無しと觀念して、フラ、ディアボロに打向ひ「大丈夫故安心して下りて来られい」と叫ぶ。

(152)

フラ、ディアボロ此聲に下を瞰ると百姓や龍騎兵等が群がつて騒いで居る様子であるが、麾下の、殊に信任して居るベツポーの言葉に、不圖乗せられて今や岩から下りんとする刹那、折柄發射した兵士の銃彈、美事に此兇漢の急處に命中して流石大評判の強賊フラ、ディアボロも岩の頂から真逆様に墜落する。

下には群集喜び極つて歡呼の聲、山谷に響き渡る。こゝに喜びの合唱があつて幕。



世界のオペラ 猶太の女

第十八

猶太の女

ハレビー作曲

DIE JUEDIN.....HALEY

此五幕物の歌劇は、スクライブ(Scribe)の作にて作曲家ハレビーは此作以前十四曲を作し、一千八百三十五年に於て初めて此作が巴里の大オペラ座にて演ぜられてから、名聲噴々たるに至つたもので、此作以前のものば不成功なられど一時の成功であつたのである。

初演 一千八百三十五年二月の廿五日巴里

場所 コンスタンツエ

時代 一千四百十四年

登場人物

大僧正、ヨハン、フォン、ブローニー Johann von Brogni (宗教裁判長) [男 低]

レオポルド Leopold (皇帝) [男 高]

オイドラ姫 Prinzessin Eudora (皇帝の息女) [女 高]

ルジエロ Ruggiero (コンスタンツエの村長) [男 中]

クレーザー Cleazar (猶太の寶石屋) [男 高]

レッシヤ Recha (クレーザーの娘) [女 高]

第一幕

コンスタンツエに於ける伽藍前の廣場。

舞臺の後方でデー、ドイム (Te Deum) の歌が唱はれる、それより人民の合唱がある、

折からコンスタンツエの村長ルジエロが出で來り、今日皇帝及教會長の命で、レオポ

世界のペオラ 猶太の女

ルド親王がフゲノット教派に對しての大勝利を祝すべく大宴會が催される、と布告せしめる。

其時に寶石屋のクレザー(猶太人)の家から金屬を鍛鍊する小槌の音が聞へる、此音を村長が耳にして、かゝる祝宴會を開く際に、彼の如き音をさせるは、祝祭を侮辱するものである、と怒り、猶太寶石商を拉し來れと命する、そこでクレザーと、其娘レツシヤが捕へられて裁判に引渡される事にある。クレザーは「猶太人ある余は、基督教徒の命に従ふの理由なく、又彼等の祝祭を尊敬するの道理なし」と放言する。是に於て村長はクレザーを以て基督教を罵れる者として、死刑に處すと威嚇する。こゝへ大僧正のヨハンが現はれる。此の大僧正は曾て此猶太人に見覺へがあるかの如く思つて其身の上を取調べて見ると、此の大僧正が未だ出家せざる前、一官吏として羅馬にあり、其時は妻もあれば、可愛らしき娘もありしに、自己の意に逆ひたりとて、此

猶太人をば暴力を以て羅馬から追放したのであつた。其の當時の事柄をクレザーが物語るのを聞いて、さては彼の時の猶太人は此のクレザーであつたかと、悪い事は出來ぬものよと、轉た、感慨に堪わざるものの如く、クレザーに「何事も昔の事は水に流し、俺の昔の事は黙つて居て呉れ、その代り以後は兄弟同前に交際して何事も世話をする」と言つたが、クレザーは「汝の世話杯は斷じて受けぬ」と拒絶をする。だが大僧正は刑に處せずして此猶太人を歸宅せしむる。さて其れからレオポルト親王が質素の黒服を着して出て來り、レツシヤを呼ぶと、レツシヤは寶石屋ある自己の家より出て來る、レツシヤは此レオポルトをば、自分の戀人たる猶太人サミュエルと思ひ違へて挨拶する。而して「今晚は妾の父のクレザーの許へ來て、猶太の復活祭を共に祝へ」と云ふ。併しレオポルトは之を拒んだが、レツシヤは承知せず、是非と云ふて我家に立ち歸る。多くの人民は喜び勇んで出て來り「水を吐きつゝありし噴水から、

今日は葡萄酒が湧き出て来た、あゝ何たる芽出度い事であらう」と叫びつゝ殆んど狂せん計りに喜ぶ。折柄こゝへ祝祭の行列が通り掛り、群集は大混雑する。其處へクレーサーと、其娘のレッシヤとが来たが群衆の爲めに居る場所が無いので漸くにして伽籃に通ずる階段の上に、見物の場席を取つた。此を見た村長ルジェロは基督教を辱しめた者として、又々捕縛して裁判に引渡さんとする。處へレオホルドが来て、巳が士官に耳語して、父子を自由の身とあらしめる。

第二幕

猶太人クレーサーの宅である。

クレーサーは大勢の客と共に、猶太の復活祭を祝つて居る。この來客猶太人の中にレオホルドが畫工と化けて居る。クレーサーは猶太教の教則に由り製せられたる特種の

酸味あるパンを一同に配る。レオホルドは基督教徒であるから、ソツト其パンを卓の下に捨てる。それを娘のレッシヤが見附る。折柄戸を叩く者がある。クレーサーは何事か起りはせぬかと心配して、一同に其場を立ち去つて貰ふ。

其處に國君の姪に當るオイドラ姫が、松火を手にする多勢の小姓を伴にして入り来る。此姫は珍奇ある裝飾品を此猶太人から講ひ求めに來たのである。それは姫と婚約せるレオホルド親王の今度の凱旋を祝する爲め呈せんとするのである。さうして姫は注文して立ち去る。最初姫が入來つた時に、レオホルドは驚いて窓の處に隠れたのである。クレーサーは娘レッシヤに對して、早く臥床せよと云ふ。レオホルドは又再び來ると云つて別れる、其處でレッシヤは

「彼の君去るも、亦來るものを」云々

のロマンツ曲を唱ふ、此曲の最後の句が終らざるに、レオホルドが窓より忍び來て「我

れは基督教信者である」と告白する。レツシヤは一時は驚いたが、終に戀の力に宗教感に打勝たれて、兩人で夜逃げを仕様とするが、父の來たので夜逃は中止せらる。父は此レオボルドを今迄猶太人とのみ信じ居りしに、基督教徒あるを聞知して、宗 教上の憎悪心から殺害せんとするのを、レツシヤが止める。レオボルドに對する娘の熱愛は、父をして非常に感動せしめ、夫婦にしてやると云ふ事にある。

此處でレオボルドは大いに狼狽する。レオボルドは猶太女を妻とする事は出来ぬ計りか、妻にする氣も無かつたからである。爲めにレオボルドは詮方なく逃走する。クレイザーは大いに怒り「我が娘を欺く不届者、復讐せずに置くべきか」と劔を手にし怒りつゝ而かも其の刹那に、段々娘の行く末を案じ出し、我は猶太人、其の娘分であるレツシヤも猶太の女、彼の女の行末の如何に成り行くべきやと、千々に心を悩まして、遂に彼れはドット倒れる。

第三幕

王宮の大廣間の場とある。

最初にバレエ曲があつて、それから高位高官がレオボルド親王とオイドラ姫の結婚を祝賀すべく来る。其處へ猶太人クレイザーと其娘レツシヤとが、前夜姫が誘へられた、美事な頸飾りを納めに來る。レオボルド親王は姫の前に跪いて、これを受取らんとする。これは皇帝の御名代として、姫が寶石入りの金鎖を親王に賜はるので、それが爲に親王は跪くのである。此時それを見て居るレツシヤは、レオボルドこそ我戀人あるを認め、突然オイドラ姫に躍り掛つて、其の寶石入りの金鎖を奪ひ、レオボルド如き詐僞漢は斯くの如き名譽の金鎖を身に着ける價值なし、猶太人ある此の疾に、戀の永久に變らざるを誓ひたる惡人ありと絶叫する。レオボルドは耻ぢらうて一言も無い。

大僧正ヨハンはレオボルド猶太人兩人を捕縛せしむる。

第四幕

此處は裁判所の大廣間で、國君の特命に依て、オイドラ姫は立會人を要せずして、猶太の女レツシヤと對談を許され、オイドラ姫はレツシヤに向つて裁判の際、レオボルドが無罪にある様に申立て、貰ひ度しと只管頼む。レツシヤは罪も無き姫を氣の毒に思ひ一切の罪は自分が獨りで引受けると約束する。姫はレツシヤに感謝して去ると、大僧正が來て、法の上にて捕はしめるも、如何にかして猶太人を救ひ度いと苦心する。元來レツシヤの命を救ふべき、唯一の手段は、父のクレイサーが基督教徒に改宗する事である。大僧正はレツシヤを氣の毒に思ひ、父のクレイサーを呼出して改宗を説き勸めるが、クレイサーは改宗杯は思ひも寄らぬと叫ぶ。彼は寧ろ死を希ふのである。

であるから「只恨むらくは、汝大僧正に對して、復讐し得ざる事を、余は生前に汝に復讐し度い」と罵り、猶大僧正に對し「あの羅馬がナポリの軍に掠奪される際、汝の家は焼け、汝の妻子は炎火の中で焼死したのを記憶するか」と絶叫する。大僧正は之れを聞き「何うか昔の厭な話は無用にして呉れ」と頼むが、クレイサーは更に一步を進めて「汝の子が將に焼死せんとする時、救けた人があるが、汝は其れを記憶するか、その救ふた人は、一人の猶太人ある事も知るまい。而してその猶太人は俺である」と言放つ。大僧正は打驚き「その救けられた子は、何うあつたか」と慌て、質問すると、クレイサーは「余は死する。汝の子の如何に爲つたかと云ふ秘密は、余の死と共に墓の中に伴つて行く」と斷言する。かく云はるれば大僧正は如何にも手之着くべき途があいので仕方なしに去る。併し大僧正の心中には、レツシヤを不憫に思ひ、如何にもして救ひ度いと思ふて居る。その時に裁判所の外部から多くの群衆の

「猶太人を殺せ〜」。その叫聲が聞へる。

第五幕

コンスタンツエ前の廣場で、後方に大なる釜があつて、下には熾んに火が燃へて居り、釜に昇るべき階段がある。これは死刑執行の場である。「死」の行進曲の下に、大僧正ヨハンは多数の僧侶兵卒を伴にして出て来る。愈々死刑の判決を受けたクレイサーと、其の娘のレシヤは此行列の後に尾いて来る。多くの群衆は見物席にあつて、此釜茹の刑を見物せんとして居る。クレイサーの方では今日死刑に處せらる者は、自分等父子と、及びレオホルドと、都合三人だと思つて居るのに、其のレオホルドが來るので不審がつて居る。實は裁判に於て、娘のレシヤがレオホルドには罪あしと云ふ事を申立てた爲め、レオホルドは死刑を免せられ、追放の刑に處せられたのである。

る。之を聞いたクレイサーは落膽する。レシヤは再び此場でレオホルドに罪の無い事を宣誓する。愈々兩人は刑に處せられんとする際、大僧正は小聲で「何うか俺の子が何うあつたかを一言して呉れ」と頼む、クレイサーは一語も發しあい。娘のレシヤは一歩〜一歩〜と熱湯の釜へと階段を昇つて行き、娘の生命が一歩宛消え行く悲惨を見て、クレイサーはレシヤを愛する情燃へん計りで、爰に心を和らげ、大僧正に「汝の子の秘密を語るが、其の秘密を語つたら、俺の子のレシヤを救つて呉れ」と頼む。レシヤは「妾獨りでは死に度く無い、死ぬなら父上と共に」と死の階段から叫ぶ。父子互に其の死を争つて居る間に、刑の執行時間が迫るので、無慈悲ある獄卒共は、レシヤを釜の中に投入れんとする。今レシヤが釜の中に飛込まんとする一刹那に、クレイサーは大僧正に向ひ釜を指して「見よ、汝の子の死すを見よ」と叫ぶのである。

第十九

ノルマー

ベリニー作曲

NORMA.....BELLINI

此の二幕の悲劇的歌劇はロマーニ Romanii の作歌に成る。

本劇は聲樂上より云ふも又悲劇の精神より評するも現今に至るまで殆も其の聲似を落さない。只純伊太利式旋律有るが爲め往々悲劇的眞理を覆へず憂へありと唱ふる一部批評家もあれど、大体より見れば、實に成功せる歌劇なりと目せられて居る。

初演 一千八百三十一年十二月二十六日伊太利ミラン

登場人名

セベール又はボーリユース Sever (羅馬の副領事) [男 高]

フラビユース Flavius (副領事の信任せる臣下) [男 高]

オロビスト Orovist (ドロイデン宗派の僧正) [男 低]

ノルマー Norma (尼長) [女 高]

クロテイルデー Clotide (ノルマーの友人) [女 高]

アダルギサ Adalgisa (イルミン寺院の尼) [女 高]

場 處 聖林及びガリラヤのイルミン寺院

時 代 古代

第一幕

柏木翁壽たる聖林中、神前には犠牲を捧ぐる卓がある。

ドロイデン宗の僧正オロビストは他の僧侶と共に羅馬の滅亡を神に祈つて去る。其跡

世界のオペラ ノルマー

へ副領事セペールが其の信任せる家來フラビュースを連れて出て来る。セペールはフラビュースに向つて「ノルマーとは既に二人の子までも有る仲だけれど、自分は最早彼女を愛し又彼女の愛を受け入れる事が出来まい心持にあつた、濟まあいとは重々思ふ。ノルマーの心中も能く知つては居る。けれども私の愛は彼女の上に無くして、却つてイルミン寺院の尼僧アダルギサの上に移つた。是に就て私は恐ろしい夢を見た。それは若し私が此の移り氣の儘に流れ漂ふならばノルマーの爲に私は必ず手痛い復讐をされる、と云ふのである。併し此の夢知らせを信じ乍らも、猶ほ私にはアダルギサを忘れる事が出来まい」と悶々の情を物語る。折柄梵鐘の響き殷々として、羅馬を打倒さんと企み、徒黨を結んで居るドロイデン宗派の僧侶等が押し寄せ来るを報ずる。兩人は之を聞いて急ぎ去る。

頓て出て来るノルマー、聖机の前に進んで其場に居並べる僧侶に對し「羅馬の瓦解する時はあらうとも、ガリラヤは永久に滅亡するの機はまい。羅馬を此の運命に誘ひ導くものは其敵にはあらで、却つて羅馬自身である」と嚴かある口調で告げる。次で自分を捨てたセペールが神の恩恵に依り再び己に還り来る様にと、衷心の祈禱の言葉があり、有名カस्ता、デバ (Casta Deva) の獨唱がある。

一同が去つた跡の此の聖林へアダルギサが来る。此の女はセペールの愛に絆されて自分もセペールを憎からず思ふ様にあつた。されども何時とはあしに此の心に動搖が起つて定まらまい。で聖机の前にひれ伏して神に判断の祈禱を捧げる。此處へセペールが来るのでアダルギサの心は再び彼れに傾き、兩人の戀は互ひに變らじと契ふ。舞臺は一轉してノルマーの邸宅と成る。

ノルマーの友、クロティルデーと呼ぶ女が、セペールとノルマーとの間に生れた二人の子供を連れて来る。二人の子を見るや、ノルマーは逝きし日の樂しかつた事の數々を偲